中国大学生第五届“走近日企、感受日本”访日代表团总结报告

2009年10月

中国日本商会　中国日本友好协会

中国大学生第五届“走近日企、感受日本”
访日代表团总结报告

第5回中国大学生＜走近日企・感受日本＞
訪日団報告書

2009年10月

中国日本商会
中国日本友好協会

中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団第五回訪日報告書

目次

報告書の刊行にあたって.....1
中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」寄付金申込社(者)一覧.....2
中国日本商会役員名簿.....3
2009年度社会貢献委員会委員名簿.....5
2009年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿.....6
王占起団長挨拶.....7
主催、共催団体の概要.....8
第5回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団団員名簿.....9
第5回訪日　ホームステイ受け入れリスト.....10
第5回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程.....11
第5回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察先出席者リスト.....12
＜訪日記録＞
人と防災未来センター視察(10/20)/担当：北京語言大学.....16
ワコール本社(10/20)/担当：北京化工大学.....19
三菱電機稲沢製作所(10/21)/担当：中国石油大学.....21
静岡県農林技術研究所・JA遠州中央園芸流通ｾﾝﾀｰ視察(10/22)/担当：首都師範大学.....24
三菱化学本社(10/23)/担当：北京化工大学.....26
東京海上日動火災保険本社(10/23)/担当：北京語言大学.....29
三菱商事本社(10/23)/担当：中国石油大学.....32
日本航空(10/27)/担当：首都師範大学.....36
学生たちの感想文から.....39
学生たちの撮った写真.....62

第５回中国大学生「走近日企・感受日本」
訪日団報告書の刊行にあたって

本書は、「走近日企・感受日本」事業の第５回訪日団の報告書です。

「走近日企・感受日本」事業は、中国日本商会が2007年から始めた中国人大学生を日本視察に招待する社会貢献事業です。未来の中国を担う若い世代に日本及び日本企業を知ってもらうことを目的に、中国日本商会の総意で実施が決議され、会員有志企業の寄付金によって費用を賄っています。過去4回の訪日団で20大学117名の学生を日本に招待してまいりました。

第5回目となる今回は、北京語言大学、北京化工大学、中国石油大学、首都師範大学の4大学から、日本に行ったことのない学生28名を選抜、一行は2009年10月19日から10月28日までの10日間、日本に滞在しました。

第５回訪日団は実は本年５月の出発を予定しておりましたが、ご存知のとおり新型インフルエンザの影響で、実施を延期していたもので、無事、実施できたことを大変嬉しく思っております。

視察先は企業では、ワコール（京都）、三菱電機稲沢製作所（愛知）、三菱ケミカルホールディングスグループ（東京）、東京海上日動火災保険（東京）、三菱商事（東京）、日本航空（東京）6社。その他、農業施設視察、阪神・淡路大震災の記念館である「人と防災未来センター」訪問、日本の大学生との交流、一泊二日のホームステイ体験など多岐にわたるプログラムが組み込まれています。ホームステイ受け入れに協力した企業・団体は18（アサヒビール、伊藤忠商事、キヤノン、新日本製鐵、住友商事、全日空、東京海上日動火災、トヨタ自動車、日本航空、日立メディアエレクトロニクス、日立マクセル、丸紅、三井物産、三菱化学、三菱商事、三菱東京UFJ銀行、三菱電機、日中経済協会）にのぼっています。

このように「走近日企・感受日本」事業は、中国日本商会の会員企業の協力によって実施されています。また、共催団体である中国日本友好協会はじめ中国側にも全面的な協力をいただいておりますし、訪日団の日本受け入れ、本報告書の編集にあたっては、財団法人日中経済協会にご尽力をいただいております。加えて、寄付金の管理については、中国側では中国友好和平発展基金会に、日本側では財団法人貿易研修センターにご協力をいただいております。改めて、本事業実施にご協力、ご尽力をいただいた皆様に厚く御礼を申し上げます。

本報告書に寄せられた参加学生のレポートを拝見いたしますと、本事業が学生たちに深い印象を残していることが分かります。本報告書をご一読いただき、日系企業の社会貢献活動の一端と中国の若者たちの生き生きとした姿に触れていただければ幸いです。

日本商会では、引き続き「走近日企・感受日本」事業を実施してまいります。本事業が日中の相互理解促進の一助となり、将来さらに大きな実を結ぶことになれば、これに優る喜びはありません。

中国日本商会　会長　小川真二郎

2010年1月

中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」
寄付金申込社(者)一覧

〔寄付金額〕1,000万円

1	朝日ビール株式会社
2	伊藤忠商事株式会社
3	キヤノン(中国)有限公司
4	新日本製鐵株式会社
5	住友商事株式会社
6	全日本空輸株式会社
7	トヨタ自動車株式会社
8	NEC(中国)有限公司
9	株式会社日本航空インターナショナル
10	株式会社日立製作所
11	丸紅株式会社
12	株式会社みずほコーポレート銀行
13	三井物産株式会社
14	三菱商事株式会社
15	株式会社三菱東京UFJ銀行

〔寄付金額〕500万円～1,000万円未満

16	株式会社イトーヨーカ堂
17	ソニー(中国)有限公司
18	豊田通商株式会社
19	三井住友銀行

〔寄付金額〕100万円～500万円未満

20	旭化成株式会社
21	味の素株式会社
22	アルプス(中国)有限公司
23	岩谷産業株式会社
24	オムロン(中国)有限公司
25	新日本石油株式会社
26	JFE鋼鉄株式会社
27	大和証券SMBC株式会社
28	株式会社電通
29	東芝(中国)有限公司
30	日産(中国)投資有限公司
31	オークマ株式会社
32	株式会社商船三井
33	株式会社JTB
34	日本たばこ産業株式会社
35	日本農林中央金庫有限公司
36	日本郵船株式会社
37	野村ホールディングス株式会社
38	松下電器産業株式会社
39	三菱化学株式会社
40	三菱電機株式会社
41	ワコール(中国)時装有限公司

〔寄付金額〕10万円～100万円未満

42	株式会社IHI
43	あいおい損害保険株式会社
44	アルパイン(中国)有限公司
45	インテック国際科学技術有限公司
46	川崎汽船株式会社
47	キッコーマン株式会社
48	協和発酵工業株式会社
49	株式会社組合貿易
50	KDDI 株式会社
51	五洲大氣社工程有限公司
52	J-POWER電源開発株式会社
53	JVC(中国)投資有限公司
54	住金物産株式会社
55	住友化学株式会社
56	住友電気工業株式会社
57	積水化学工業株式会社(京都研究所)
58	双日株式会社
59	太平洋セメント株式会社
60	宝酒造株式会社
61	株式会社竹中工務店
62	大日本印刷株式会社
63	大福自動輸送機(天津)有限公司
64	長富宮中心有限責任公司
65	帝人株式会社
66	株式会社東京機械製作所
67	東工コーセン株式会社
68	東レ株式会社
69	トヨタモーターファイナンスチャイナ
70	株式会社日新
71	株式会社損害保険ジャパン
72	マルチメディア振興センター
73	日本東京海上日動火災保険株式会社
74	日立高科技貿易(上海)有限公司
75	日立租賃(中国)有限公司
76	阪和興業株式会社
77	ブラザー(中国)商業有限公司
78	北京HYFソフト有限公司
79	北京キューピー食品有限公司
80	北京KDDI 通信技術有限公司
81	北京宏達日新電機有限公司
82	北京新世紀日航飯店
83	北京図新経緯導航系統有限公司
84	北京日立華勝信息系統有限公司
85	北京日立控制系統有限公司
86	北京村田電子有限公司
87	本田技研工業(中国)投資有限公司
88	前田建設工業株式会社
89	三井化学株式会社
90	三井住友海上火災保険株式会社
91	三菱自動車工業株式会社
92	三菱重工業株式会社
93	三菱UFJ証券株式会社
94	三菱UFJ信託銀行
95	明治安田生命保険相互会社
96	明和産業株式会社
97	柳田　洋
98	湯浅　弘
99	理光軟件研究所(北京)有限公司
100	ヤマハ発動機株式会社

〔寄付金額〕10万円未満

101	北京エプソン電子有限公司
102	北京集佳知識産権代理有限公司
103	日本海事協会

2009年度　中国日本商会役員一覧

11月度現在

商会役職	氏　名	会社名	役職
会長	小川　真二郎	三井物産	常務執行役員　中国総代表
副会長	山﨑　史雄	アサヒビール	常務執行役員　中国総代表
副会長	桑山　信雄	伊藤忠	常務執行役員　中国総代表
副会長	小澤　秀樹	キヤノン	取締役　中国総裁
副会長	林　岳志	新日本製鐵	中国総代表　北京事務所長
副会長	梶原　謙治	住友商事	専務執行役員　中国総代表
副会長	佐藤　信之	全日本空輸	執行役員 中国統括室長兼北京支店長
副会長	田中　孝明	東芝（中国）	東芝 執行役常務　中国総代表　兼董事長
副会長	加藤　雅大	トヨタ自動車（中国）投資	総経理
副会長	堂ノ上　武夫	日中経済協会	北京事務所長
副会長	佐々木　伸彦	日本貿易振興機構	北京代表処　所長
副会長	大野　信行	日立（中国）	執行役常務　中国総代表兼董事長
副会長	清水　教博	丸紅	常務執行役員　中国総代表
副会長	入沢　稔	みずほコーポレート銀行	北京支店長
副会長	末木　孝幸	三菱電機（中国）	董事長兼総経理
副会長	木島　綱雄	三菱商事	常務執行役員　中国総代表
副会長	里井　庚士	岩谷産業	中国総代表
理事	川﨑　一彦	双日（中国）	常務執行役員　中国総代表
理事	横井　昭正	豊田通商	中国総代表
理事	長岡　秀典	阪和興業	中国副総代表北京事務所長
理事	渋谷　龍一	住金物産	北京事務所　所長
理事	加悦　文雄	東工物産貿易	北京分公司　副総経理
理事	小笠　一之	株式会社IHI	北京代表処　首席代表、所長
理事	永田　泰	川崎重工業	北京代表処　首席代表
理事	高橋　千秋	竹中工務店	首席代表
理事	笹原　勉	日揮　北京事務所	首席代表
理事	橋本　泰昭	日産（中国）投資有限公司	董事　総経理
理事	山浦　重雄	日立金属	北京駐在員事務所　所長
理事	洪　嘉偉	前田建設工業	北京駐在員事務所　首席代表
理事	石渡　康夫	捷帕瓦電源開発諮詢	総経理
理事	白井　省三	アルプス（中国）	総経理
理事	猪瀬　崇	NTT	中国総代表
理事	石本　孝典	NTTコミュニケーションズ	中国総代表
理事	佐野　昇	NTTドコモ	北京事務所　所長
理事	増山　寛	マルチメディア振興センター	北京代表処　首席代表
理事	久保田　陽	ソニー株式会社	董事長 中国総代表
理事	山田　正晴	京セラ	北京代表処　首席代表
理事	金子　肇	日電（中国）	総裁
理事	高澤　信哉	富士通（中国）	副総経理
理事	木元　哲	パナソニックチャイナ	副董事長

商会役職	氏　名	会社名	役職
理事	森山　博之	旭化成	北京事務所　所長
理事	中村　総明	伊藤喜商貿（上海）	北京分公司　総経理
理事	千葉　雅哉	凸版印刷	北京駐在員事務所　首席代表
理事	山口　俊和	北京ヤクルト	副総経理
理事	深谷　弦希	邦博（北京）医薬技術開発	代表取締役
理事	小谷　正直	堀場貿易（上海）	北京分公司　総経理
理事	池本　一彦	三菱化学	理事　北京事務所長
理事	田村　宏生	中央三井信託銀行　北京事務所	所長
理事	渋谷　慎志	大和證券SMBC　北京代表処	代表
理事	植村　健二	東京海上日動火災保険	中国総代表
理事	新川　陸一	日本銀行	北京事務所　首席代表
理事	太田　忠利	三井住友銀行（中国）	北京支店長
理事	光井　良	三菱東京UFJ銀行（中国）	北京支店長
理事	日比　浩二	北京山九物流有限公司	総経理
理事	横田　恵三郎	日本航空	執行役員　中国総代表兼北京支店長
理事	伊藤　隆夫	日本郵船	中国総代表
理事	吉村　久夫	JTB　CHINA	執行役員　中国総代表
理事	麦倉　弘	イトーヨーカ堂	常務執行役員　中国室長
理事	松島　訓弘	電通	執行役員　中国総代表　北京事務所長
理事	三木　日出男	日航国際旅行社	董事長　総経理
理事	鈴木　浩	長富宮中心	総支配人
理事	田淵　真次	日中経済貿易センター	専務理事　北京事務所長
理事	田中　雅教	日本国際貿易促進協会	北京事務所　所長
理事	河内　洋輔	国誉商業（上海）	総経理
理事	石舘　周三	資生堂（中国）研究開発中心	董事　総経理
理事	内藤　規夫	北京ビール朝日	董事　総経理
理事	川畑　保	北京発展大廈	董事　総経理
理事	片平　猛	電源開発	中国総代表
理事	鈴木　正孝	オリンパス	取締役　専務執行役員 奥林巴斯（中国）董事長
理事	井原　幸治	宝酒造食品	董事総経理
監事	三浦　智志	監査法人トーマツ	パートナー
監事	越智　幹文	国際協力銀行	首席代表

2009年度社会貢献委員会委員名簿

	氏　名　　（会社名・役職）
社会貢献委員長	桑山　信雄　　（伊藤忠　常務執行役員　中国総代表）
社会貢献副委員長	北野　雅教　　（伊藤忠　審議役 中国副総代表（兼）伊藤忠（中国）集団有限公司 総経理）
委員	小川　真二郎　（三井物産　常務執行役員　中国総代表）
委員	山﨑　史雄　　（アサヒビール　常務執行役員　中国総代表）
委員	小澤　秀樹　　（キヤノン　取締役　中国総裁）
委員	林　岳志　　（新日本製鐵　中国総代表　北京事務所長）
委員	梶原　謙治　　（住友商事　専務執行役員　中国総代表）
委員	佐藤　信之　　（全日本空輸　執行役員 中国統括室長兼北京支店長）
委員	田中　孝明　　（東芝 執行役常務　中国総代表兼董事長）
委員	加藤　雅大　　（トヨタ自動車（中国）投資　総経理）
委員	堂之上　武夫　（日中経済協会　北京事務所長）
委員	佐々木　伸彦　（日本貿易振興機構　北京代表処　所長）
委員	大野　信行　　（日立（中国）　執行役常務　中国総代表兼董事長）
委員	清水　教博　　（丸紅　常務執行役員　中国総代表）
委員	入沢　稔　　（みずほコーポレート銀行　北京支店長）
委員	木島　綱雄　　（三菱商事　常務執行役員　中国総代表）
委員	末木　孝幸　　（三菱電機（中国）董事長兼総経理)
委員	高羽　人志　　（ジェイテイービー 北京事務所　事務所長）
委員	横田　恵三郎　（日本航空　執行役員　中国総代表兼北京支店長）

2009年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿

会社名	氏名	役職
【社会貢献委員長】	桑山　信雄	伊藤忠　常務執行役員　中国総代表
【社会貢献副委員長】	北野　雅教	伊藤忠　審議役 中国副総代表（兼）伊藤忠（中国）集団有限公司 総経理
【ＷＧ座長】	堂ノ上 武夫	日中経済協会 北京事務所長
アサヒビール	横山　真吾	中国代表部　担当課長
伊藤忠	篠原　弘樹	中国人事・総務部長代行
キヤノン	原　浩一郎	企画本部　DIRECTOR
新日本製鐵	扇　常夫	代表
JTB	高羽　人志	事務所長
住友商事	能勢　敦司	華北管理部門　総括部　副部長
	韓　建平	総括部　総務科長
全日本空輸	柏木　寿州	銷售部　経理
東芝（中国）	馬場先　雄二	総裁室　副室長
トヨタ自動車	栗田　弘毅	渉外部主査
日中経済協会	葛西　敦	所長代理
日本航空インターナショナル	柴田　晃伸	中国地区旅客営業部副総経理
日本貿易振興機構	島田　英樹	進出企業支援センター　副センター長
日立	加子　茂	グループ会社業務シナジー推進センター総経理 コミュニケーションプラットフォーム本部長
丸紅	稲積　和典	総代表助理
三井物産	劉　玉氷	業務人事部　経理
三菱商事	李　征	中国総代表室　経理
三菱電機	原　正英	副総経理
三菱東京UFJ銀行	佐藤　竹彦	取引先二課　支店長代理
【オブザーバー】	横井　理夫	広報文化センター　一等書記官
【オブザーバー】	長谷川　綾子	経済部　三等書記官
【訪問先企業】	小杉　光秀	東京海上日動火災　北京代表処　代表
【訪問先企業】	内田　康一	三菱化学　北京事務所　副所長
【訪問先企業】	石谷　隆文	華歌爾（中国）時装有限公司　総経理
【訪日中のアテンド等】	渡辺　光男	日中経済協会　（東京）　総務部参与

第5回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日団報告書
団長挨拶

第5回「走近日企・感受日本」中国大学生代表団一行32名は、中国日本商会の招きを受け、2009年10月19日から28日にかけて神戸、京都、愛知、静岡、東京などを訪問しました。日中経済協会及び各企業、学校、家庭の行き届いた手配のもとで充実した楽しい10日間を過ごすことができましたことを心よりお礼申し上げます。

代表団は10日の滞在期間にワコール、三菱電機、三菱化学、東京海上日動火災保険、三菱商事などの日本の有名企業だけでなく、静岡県の農林技術研究所、農林大学校、JA遠州中央園芸流通センターなどの農業施設も見学しました。日本の大手企業の進んだ経営理念と強大な技術力、そして農林分野の豊かな研究成果と発達した農産物流通システムは学生たちの心に深く残り、そこから得たものは計り知れないものがありました。また、日本の伝統文化や美しい自然も存分に味わうことができました。古都京都では清水寺と二条城を見学し、箱根では温泉も体験し、富士山の景色に心を奪われました。

日本の大学生との交流や日本の一般家庭での体験は学生たちにとって生涯忘れられない思い出となりました。京都と東京の大学生との交流や一般家庭への訪問によって、団員一人ひとりの心に友好の種がまかれたものと信じます。互いに別れを惜しんで流した涙や固く交わした抱擁は、今回の代表団の最大の収穫のひとつです。多くの学生が「今回の訪問では多くのことを学び、感じ、視野が広がった。今後の自分の生活を変えるような旅だった」という感想を寄せています。

今回の代表団は北京語言大学、首都師範大学、中国石油大学、北京化工大学の4大学から選ばれた優秀な学生によって結成されました。10余りの専攻と5つの民族の学生たちが毎日、ペンやカメラあるいは心で自分の目に映ったさまざまな日本を記録しました。学生たちの日本と日本人に対する友好の気持ちは、彼らの日記から感じていただけると思います。

最後に、代表団の訪日のためにご尽力いただきましたすべての関係者に重ねて心より感謝申しあげます。学生たちが自らの耳で聞き、目で見て、心で感じた日本を周りの人たちに伝え、両国民の末長い友好のために力を尽くし、中日友好事業の新しい架け橋とならんことを期待いたします。

第5回中国大学生訪日団　団長　王占起

主催、共催団体の概要

中国日本商会

在北京企業の円滑な事業活動を支援するとともに、日中間の経済交流の活発化を通じて、日中友好を促進することを目的として、1980年10月に設立された北京日本商工クラブを前身とする。中華人民共和国国務院令第36号「外国商会管理暫行規定」に基づき認可された外国人商工会議所の第1号として、1991年4月22日に設立された。

会員数は、2009年11月末日現在、市内法人会員644社、市外法人会員52社、個人会員41名、賛助会員8名の合計745社（名）を擁している。

中国日本友好協会

1963年に中華全国総工会、中国人民外交学会など19の民間団体によって発起設立された、中国における最も代表的な対日民間友好組織である。創立以来、周恩来総理の提唱の下で積極的に対日友好交流活動を展開し、1972年の中日国交正常化と1978年の中日平和友好条約の締結においては大きな貢献を果たした。政治、経済、文化、スポーツなどの各分野で対日友好交流事業を強力に展開し、健全で安定的な両国関係の推進に重要な役割を果たしている。

中国友好和平発展基金会

中国人民対外友好協会の下部組織として、1996年に設立された。各国との友好増進、国際協力の推進、世界平和、共同発展を主旨とし、世界平和と人類の進歩に貢献するため、中国と海外各国との友好事業を始め、文化、教育、医療衛生、環境保護、スポーツ、経済、貧困支援などの数多くの分野で社会的公益活動を行っている。

財団法人貿易研修センター

国際的な経済活動に携わる官民の人材の育成と我が国と外国との経済交流促進を目的に、「貿易研修センター法」に基づく特別認可法人として1967年に設立された。

財団法人日中経済協会

経済産業省を始めとする日本政府及び日本経済団体連合会他経済界の支援の下に、日本と中国との経済交流促進のため、1972年に設立された。

第5回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団団員名簿

		姓　名	性別	所　　属
1	団 長	王占起	男	中国日本友好協会 経済交流･都市交流部 部長
2	団 員	臧　楠	女	北京語言大学 外国語学院日語系
3	団 員	崔上智	女	北京語言大学 外国語学院日語系
4	団 員	黄　征	男	北京語言大学 外国語学院日語系
5	団 員	成　鵬	男	北京語言大学 外国語学院日語系
6	団 員	張偉鑫	女	北京語言大学 外国語学院日語系
7	団 員	蔡　瑋	女	北京語言大学 外国語学院日語系
8	団 員	徐　菲	女	北京語言大学 外国語学院日語系
9	団 員	彭立宇	男	北京化工大学　生命科学･技術学院
10	団 員	鄧玲玲	女	北京化工大学　生命科学･技術学院
11	団 員	高　遠	女	北京化工大学　生命科学･技術学院
12	団 員	王　越	女	北京化工大学　経済管理学院
13	団 員	羅龍哲	男	北京化工大学　材料科学･工程学院
14	団 員	陳夢君	女	北京化工大学　材料科学･工程学院
15	団 員	趙立薇	女	北京化工大学　材料科学･工程学院
16	団 員	張振欣	男	中国石油大学　石油天然気工程学院
17	団 員	何艶娜	女	中国石油大学　工商管理学院
18	団 員	耿阿楠	女	中国石油大学　石油天然気工程学院
19	団 員	周　鵬	男	中国石油大学　機電工程学院
20	団 員	趙若彤	女	中国石油大学　化学科学院工程学院
21	団 員	安天琳	男	中国石油大学　資源･信息学院
22	団 員	温　浩	男	中国石油大学　石油天然気工程学院
23	団 員	劉　吉	女	首都師範大学　政法学院
24	団 員	于阿楠	女	首都師範大学　政法学院
25	団 員	趙　蕓	女	首都師範大学　外国語学院日語系
26	団 員	邵玉珊	女	首都師範大学　外国語学院日語系
27	団 員	郭潔威	女	首都師範大学　外国語学院日語系
28	団 員	王邸玥	女	首都師範大学　芸術･伝媒学院
29	団 員	謝黙超	男	首都師範大学　生命科学学院
30	事務局	王　磊	男	中国日本友好協会　経済交流･都市交流部
31	団 員(引率教員)	林秀琴	女	首都師範大学　国際文化学院　副院長
32	団 員(引率教員)	朱冬香	女	北京化工大学　学生工作弁公室

第５回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程

日次	月日	日程	宿泊地
1	10月19日 （月）	13:50　北京首都国際空港発（JL786便） 17:45　関西国際空港着 19:00　ベイシャトルにて神戸港へ 19:29　神戸港着、バスにてホテルへ 21:30　ホテル着	神　戸 クラウンプラザ神戸
2	10月20日 （火）	09:00　ホテル発 09:00～10:00　神戸市内観光：生田神社、南京街等 10:00～10:40　神戸震災メモリアルパーク視察 **11:10～13:00　人と防災未来センター　防災未来館視察** **15:00～17:00　ワコール視察** **17:30～20:00　京都学生祭典実行委員会の学生との交流会** 20:30　ホテル着	京　都 グランドプリンスホテル 京都
3	10月21日 （水）	08:30　ホテル発、**京都学生との交流イベント** 09:00～10:00　二条城（京都学生の案内） 10:30～11:30　清水寺（京都学生の案内） 13:22　京都発　新幹線のぞみ230号にて名古屋へ **15:00～17:00　三菱電機稲沢製作所視察** 19:15　浜松着	浜　松 ホテルコンコルド浜松
4	10月22日 （木）	08:30　ホテル発　バスにて磐田市へ **09:30～11:30　静岡県農林技術研究所視察（農林大学校含む）** **13:15～14:15　JA遠州中央 園芸流通センター視察** 17:00　箱根温泉着（温泉体験と日本旅館体験）	箱根湯本温泉 ホテルおかだ
5	10月23日 （金）	08:00　ホテル発、小田原駅へ 08:50　小田原発　新幹線こだま630号にて品川へ **10:00～12:30　三菱化学（株）本社視察（昼食含）** **13:30～15:15　東京海上日動火災保険（株）本社視察** **16:00～19:30　三菱商事㈱本社視察（夕食含）** 20:00　ホテル着	東　京 ホテルニューオータニ
6	10月24日 （土）	09:30　日中経済協会着 ※ホームステイ家族の中国大学生出迎え 終日　学生はホームステイ	ホームステイ
7	10月25日 （日）	**午前～午後　ホームステイ** 16:00　ホテルニューオータニに集合 全員チェックイン後、バスにてお台場へ 20:00　ホテル着	東　京 ホテルニューオータニ
8	10月26日 （月）	朝　ホテル発　秋葉原へ **11:00～12:30　中国大使館表敬訪問** 午後　東京都内観光：東京タワー 観光後　一橋大学へ（東京～国立：約1時間） **15:00～19:30　一橋大学にて交流会　（夕食含）** ホテル着	東　京 ホテルニューオータニ
9	10月27日 （火）	朝　ホテル発 **09:30～12:30 JAL視察　（昼食含）** 午後　東京ディズニーランド観光 ホテル着	東　京 ホテルニューオータニ
10	10月28日 （水）	09:20　ホテル発 10:00～11:30　東京都内観光：日本科学未来館 12:00～13:30　昼食：送別パーティー 14:00　成田空港へ出発 18:10　成田国際空港発（JL789便） 21:20　北京首都国際空港着 到着後解散	

第5回中国大学生「走近日企・感受日本」
訪日団視察先出席者リスト

1．人と防災未来センター（10月20日）

久保　恵三郎　　人と防災未来センター　語り部
蔡　勝昌　　人と防災未来センター　ボランティア
その他に各コーナーに数名のボランティアの方

2．株式会社ワコール（10月20日）

山本　忠司　　取締役専務執行役員　国際本部長
石川　満良　　総合企画室　広報・宣伝部　部長
楠木　章弘　　総合企画室　広報・宣伝部　広報課　課長
岸本　泰蔵　　人間科学研究所　研究総務課　課長
関口　満　　国際本部　営業部　中国・台湾課　課長
津田　哲平　　国際本部　営業部　中国・台湾課　係長

3．第7回京都学生祭典実行委員会学生との交流（10月20日、21日）

小石原　範和　　京都府　副知事
井上　元　　京都府　政策企画部　企画監
金谷　宗子　　京都府　政策企画部　調整課長
三宅　正之　　京都府　政策企画部　調整課　参事
志賀　淳司　　京都府　政策企画部　調整課　調整担当主事
鍋岡　崇　　京都府　国際課　推進・迎賓担当副主査
別　丹丹　　京都府　通訳応援（陝西省から出向中）
西浦　明　　(財)大学コンソーシアム京都　事務局長
山野　高宏　　(財)大学コンソーシアム京都　事務局次長
久保　歩　　(財)大学コンソーシアム京都　学生交流事業部　主幹
北山　広喜　　(財)大学コンソーシアム京都　学生交流事業部　主幹
村田　哲子　　(財)大学コンソーシアム京都　学生交流事業部　主査
秋山　翔　　第7回京都学生祭典実行委員会　実行委員長
外山　泰久　　第7回京都学生祭典実行委員会　実行副委員長
北岡　裕子　　第7回京都学生祭典実行委員会　実行副委員長
他に第7回京都学生祭典実行委員会の学生実行委員・京都大学・立命館大学学生合わせて50名

4．三菱電機株式会社　稲沢製作所（10月21日）

中原　裕治　　稲沢製作所　副所長
松下　浩一　　稲沢製作所　営業部　海外営業第一課長
山本　英明　　稲沢製作所　営業部　海外営業第一課
忻　夷　　稲沢製作所　営業部　海外営業一課

周　密　　稲沢製作所　営業部　海外技術第一課
鈴木　健次郎　　稲沢製作所駐在　ﾋﾞﾙｼｽﾃﾑ業務統括部総務部　人事研修課長
山本　浩之　　稲沢製作所駐在　ﾋﾞﾙｼｽﾃﾑ業務統括部総務部　人事研修課専任
高　永聡　　稲沢製作所駐在　ﾋﾞﾙｼｽﾃﾑ業務統括部総務部　人事研修課

5. 静岡県農林技術研究所/農林大学校（10月22日）
谷　正広　　静岡県産業部理事　農林技術研究所長
柴田　茂樹　　静岡県農林技術研究所　企画経営部　主幹
中村　公則　　静岡県立　農林大学校　教務部　主査
杉本　達男　　静岡県産業部　農業振興室

6. JA遠州中央園芸流通センター（10月22日）
大橋　弘和　　JA遠州中央　営農振興部　園芸流通センター　課長
杉本　達男　　静岡県産業部　農業振興室

7. 三菱化学株式会社本社（10月23日）
奥川　隆生　　三菱ケミカルホールディングス㈱/三菱化学㈱　執行役員
小林　裕和　　三菱化学㈱　ｺｰﾎﾟﾚｰﾄﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞ部　理事・部長
五十嵐　了　　三菱化学㈱　ｺｰﾎﾟﾚｰﾄﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞ部　ｹﾐｽﾄﾘｰﾌﾟﾗｻﾞ　ﾌﾟﾗｻﾞ長
石渡　直明　　三菱化学㈱　ｺｰﾎﾟﾚｰﾄﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞ部　海外事業企画G　次長
和田　一之　　三菱化学㈱　ｺｰﾎﾟﾚｰﾄﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞ部　ｹﾐｽﾄﾘｰﾌﾟﾗｻﾞ　ﾏﾈｰｼﾞｬｰ
松木　真一　　三菱化学㈱　知的財産部
孫　志華　　三菱化学㈱　ｺｰﾎﾟﾚｰﾄﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞ部　海外事業企画G　中国室
孫　佩莉　　三菱化学㈱　ｺｰﾎﾟﾚｰﾄﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞ部　海外事業企画G
劉　雲龍　　三菱化学㈱　知的財産部　特許/横浜総合研究所
曹　岩　　日本ポリプロ㈱　第1営業本部
薛　瑛璐　　日本ポリエチレン㈱　包装資材営業本部
戸川　陽一　　エムシーヒューマネッツ㈱　総務部長

8. 東京海上日動火災保険株式会社（10月23日）
永野　毅　　東京海上日動火災保険㈱　常務取締役
村木　満　　東京海上日動火災保険㈱　経営企画部　部長　兼　CSR室長
高津　義明　　東京海上日動火災保険㈱　経営企画部　計画推進室　担当課長
藤田　桂子　　東京海上日動火災保険㈱　経営企画部　CSR室　担当課長
高橋　将文　　東京海上ﾎｰﾙﾃﾞｨﾝｸﾞｽ㈱　海外事業企画部　中国東・ｱｼﾞｱ室ｱｼｽﾀﾝﾄﾏﾈｰｼﾞｬｰ
張　梅　　東京海上ﾎｰﾙﾃﾞｨﾝｸﾞｽ㈱　海外事業企画部　中国東・ｱｼﾞｱ室ｱｼｽﾀﾝﾄﾏﾈｰｼﾞｬｰ
李　海営　　東京海上ﾎｰﾙﾃﾞｨﾝｸﾞｽ㈱　海外事業企画部　中国東・ｱｼﾞｱ室

9. 三菱商事株式会社（10月23日）

木島　綱雄　　常務執行役員　中国総代表
植月　晴夫　　理事　コーポレート担当役員補佐
小山　雅久　　業務部　中国室　室長
横山　勝明　　業務部　中国室　次長
日野　正平　　業務部　中国室　部長代理
吉野　史晃　　業務部　中国室
英　謙　　業務部　中国室
高橋　謙也　　環境・CSR推進室　シニアアドバイザー
千住　孝一郎　環境・CSR推進室　課長
石井　真理子　環境・CSR推進室
李　雪　　HRDセンター
方　霞紅　　HRDセンター
鄭　花子　　重機・鉄構ユニット
中澤　輝幸　　バテルジャパン㈱　顧問
中澤　はるみ　（中澤輝幸氏夫人）

10. 中華人民共和国駐日本国大使館（10月26日）

崔　天凱　　中華人民共和国　駐日本国　特命全権大使
張　成慶　　中華人民共和国　駐日本国大使館　参事官
杜　暁曦　　中華人民共和国　駐日本国大使館　友好交流部　アタッシェ
張　社平　　中華人民共和国　駐日本国大使館　大使秘書官
姜　琦　　中華人民共和国　駐日本国大使館　三等書記官（報道担当）

11. 一橋大学（10月26日）

吉野　正巳　　事務局長
鶴田　庸子　　留学生センター長
田崎　宣義　　元副学長
前原　康宏　　役員補佐
中野　聡　　役員補佐
佐藤　修二　　学務部長
陸名　明　　学務部　留学生課長
中俣　隆　　学務部　留学生課長代理
山田　剛己　　学務部　留学生課主査
外田　恵子　　総務部　研究支援課主任
笹原　哲　　関満博ゼミナール幹事
陳　翌　　商学研究科修士課程（当日通訳）
高　蕾　　商学研究科修士課程（当日通訳）
他に関ゼミ学生他22名

12. 株式会社日本航空インターナショナル

（全行程）

岩本　浩一　　中国事業推進部　課長

小田　和彦　　中国事業推進部　課長

秦　娟　　中国事業推進部

（羽田整備場）

清水　保俊　　広報部　羽田広報グループ

（客室乗務員訓練センター）

岡田　典子　　客室乗務員訓練センター　インストラクター

市川　元子　　客室乗務員訓練センター　インストラクター

種市　知晴　　客室本部　客室品質企画部　客室教育・訓練室　サービス訓練グループ

災害の恐ろしさと教訓

北京語言大学学生代表

見学日時：2009年10月20日（火） 11:10～13:00
見学場所：人と防災未来センター（神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2）

見学概要：

人と防災未来センターは、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災を記念して設立された施設である。マグニチュード7.2を記録したこの大地震では6,434人が死亡し、44,000人近くが負傷した。また、およそ65万の建物が損害を被り、30万人余りの人々が住む家を失った。当センターは阪神・淡路大震災の各種資料の収集・保存という以外に、防災に携わる人材の育成と防災方法の研究という重責を担っている。

写真1：人と防災未来センター

今年77歳になる久保さんが、阪神大震災での自らの体験を語るためにわざわざ来てくれた。優しそうな感じのする老人だった。久保さんが私たちに会ってまずしたことは謝罪だった。1937年当時、父親が関東軍の中佐であった久保さんは、当時の日本軍が中国人に対して行ったことの全てを認め、私たちに深々と頭を下げてその罪を詫びたのだ。私たちは久保さんのその誠意に心を打たれ、彼が語り始めた地震の記憶に強く惹きつけられていった。14年前、地震発生の前後数分間に自身の身に起こったことを、久保さんはありのままに語ってくれた。話を聞きながら、大自然の力の前に人間はかくも弱い存在であるということ、そして死と隣りあわせの状況に追いやられたときの為す術のなさをしみじみと感じた。久保さんの話しぶりがあまりに真に迫っていたので、たった十数秒の間に家族や家を失った人々が、変わり果てた町の姿を目にしたときの恐怖と孤独感が、ひしひしと伝わってくるようだった。それから久保さんは「我们在一起,明天会更好(みんなで力を合わせれば、明日はもっとすばらしい)」という文字の書かれた旗と黄色い菜の花の花束を取り出して私たちに見せてくれた。「黄色の菜の花は希望を象徴する花なのですよ」。久保さんが言った。四川大地震の際、久保さんは四川に向かった。旗と花はそのときに現地の学生が彼に送ったものだった。久保さんは「四川の被災者たちには早く悲しみから立ち直って

もらいたい。必ず復興できると信じている」という励ましの言葉を託した。また久保さんは私たちに向かって「大地震がもたらした痛みを風化させてはならない。その経験や教訓を後代に伝えていかなければならない。そして命の尊さや共に生きることのすばらしさを世界の人たちに発信していかなければならない」と戒めるように語った。

防災記念館では阪神大震災を追体験した。

地震体験コーナーには、座席の前方にたくさんの多角形を繋ぎ合わせたような半円形の画面があった。観客を震え上がらせるような臨場感は、この特殊な画面とリアルな音響効果によるものだ。

地震体験が始まった。照明が消えた。真っ暗な闇の中でまるでこれから自分たちが本当の地震に遭遇するかのような緊張感を覚えた。すると画面がぱっと明るくなり、そこに地震が発生する前の、早朝の神戸の風景が映し出された。人気のない街が静まり返っている。次の瞬間、地震が起こった。地面が猛烈な勢いで揺れ、地の底から恐ろしい音が鳴り響く。まるで地面が痛みに耐えかねて発する叫び声のようだ。続いて地面が裂け始める。一瞬のうちに底も見えないような深い亀裂が道の真ん中にできていた。人間のつくったコンクリートの地面も地震という巨大な“生物”の手にかかっては、せいぜいフランスパンぐらいの強度しかない。引きちぎるのに数秒もかからなかった。

道路沿いのビルはまるで紙で作ったおもちゃのように、垂直方向につぶされてしまっている。ぺちゃんこになって、もはや形すら留めていない階もある。数十階の高層ビルが一瞬にして背が縮んだかのようになっている。ガラスの割れる音、コンクリートや鉄筋が崩れる音が轟音となって響き渡る。そのすさまじさは画面を見ている私たちを震え上がらせるのに十分だった。

バスはいつものように高速道路を走っていた。しかし、次の瞬間、巨大な轟音と共に目の前の道路が消えた。高架橋がいつの間にかなくなっていたのだ。運転手はきっと混乱の極みに陥ったにちがいない。しかし幸いにも、とっさに急ブレーキを踏み、路面が消えた一歩手前で踏みとどまった。生死はまさに紙一重のところで分かれた。

見る者を震え上がらせるような臨場感ある映像に照明や音響の効果が相まって、私たちはまるで阪神大震災の10数秒間に連れ戻されていったかのようだった。たった10秒間の地震は計り知れないほどの破壊をもたらした。大自然の力の前に人間はかくもちっぽけな存在であったとは……。人々が日々の暮らしの中でつくり上げてきた世界は、全て紙ででもできているかのように、たったひと揺れで破壊しつくされた。人の命がこんなにも脆いものであるとは思いもしなった。ある日突然、天から災難が降りかかれば、人の命はいとも簡単に奪われてしまうのだ。

防災記念館では、他のボランティアの案内で阪神・淡路大震災から得た教訓や防災分野における成果等の展示を見学した。ボランティアの話を聞いて阪神大震災がもたらした被害の甚大さを改めて感じた。わずか10数秒の間に6千人余りの人命が失われ、25万棟弱の家屋が倒壊した。亡くなった人たちはもう帰ってこない。生き残った人たちは涙を拭いて、二度とこのように悲惨な代償を払うことのないように、知恵をしぼり、前に進んで行くしかない。人と防災未来センターは、まさに後世の人たちを教育し、警鐘を鳴らすことをその役割としている。災害に見舞われた時、いかに被害を最小限度に食い止めるかを人々に教える場所なのだ。

2名のボランティアの人が一連の実験によって“制震装置”と“耐震構造”について説明してくれた。見学に来る小学生にも解りやすいようにという配慮からであろうか、簡単な実験を通していろいろな原理が理解できるようにしてある。例えば、可動基礎やトラス構造を活用していかに地震による建物への影響を軽減するか、建物の基礎を深くすることで地震後の地下水による建物への影響が抑えられるといった

ようなことが紹介されていた。今回初めて知ったのだが、地震で倒壊する建物の大部分は、実は震動のせいだけで倒壊するというわけではなく、地震によって地下水の水位が上昇し、それにより建物の基礎が直撃されて倒壊に至るということである。解説員が解りやすく話してくれたことによれば、家屋の基礎を強化し、鉄筋を多めに入れ、道具を使って家具を固定するだけで、災害時の被害を軽減することができるということなので、是非実行したいと思う。

人と防災未来センターの前に、神戸港震災メモリアルパークを見学した。このメモリアルパークは、阪神大震災の当時の惨状や地震後の生活、復旧の様子などを後世に伝えることを目的に造られた記念公園である。園内には写真や映像などによって震災前と震災後の神戸市の全貌や神戸港の被害状況、復旧の過程などが展示されていた。

波止場に沿って歩いていると、本来真っ青な海があるべき場所にねじ曲がったコンクリートの道路がむき出しになっているのが目に入った。欄干の傍には斜めになった街灯が何本か突き出ていた。ガイドさんによれば、震災当時、最も被害が大きかったメリケン波止場の一部を、当時のままにここに保存しているという。メリケン波止場は今ではすっかり復旧しているが、ここに当時の無残な姿を残すことで、災害に備える意識を常に忘れてはならないと、人々に警鐘を鳴らしているのだ。

写真2　：久保さんと北京語言大学学生代表の記念写真

神戸港震災メモリアルパークでも人と防災未来センターでも、地元の小中学生がたくさん見学に訪れていた。明るい子供たちの表情が震災記念施設の重々しい空気を和らげていた。あの子たちはおそらく神戸大震災の生存者たちの子供だろう。青空と降り注ぐ太陽の光の下での健康で楽しげな彼らの姿は、あの地震の中で命を落としていった人たちにとっても最大の慰めになるはずだ。私たちも四川大地震で傷ついた子供たちがたくましく生き、それぞれ明るい未来を切り開いていけますようにと、心から祈った。

すべての女性を美しく――ワコール

北京化工大学学生代表

見学日時：2009年10月20日（火）15:00～17:00
見学場所：京都市南区吉祥院中島町29

見学概要：
会社紹介：ワコールは1949年の創業で、下着（女性用ボディースーツ、下着、ショーツ、パジャマなど）、ジャケット、スポーツウエア及び繊維製品を製造・販売をしている会社である。現在は乳癌で乳房を失った人用の下着の製造と癌予防のピンクリボン運動に力を入れている。

社訓：わが社は相互信頼を基調とした格調の高い社風を確立し、一丸となって世界のワコールを目指し不断の前進を続けよう

見学の感想：
20日の午前中に神戸での見学を終えた私たちは、ワコールを見学するために列車で京都に向かった。ワコールに到着すると、社員の皆さんが玄関で出迎えてくれていた。玄関ホールに入り、立派なビルに驚いていると、五星紅旗が目にとまった。私たちを歓迎するために特別に五星紅旗を掲げてくれたのだ。私たちとワコールの間の距離が急に縮まったような気がした。

2時間の見学では、会社の概要を紹介した中国語版DVDを見たり、「人間科学研究所」やワコール博物館を見て回った。質疑応答の時間もあった。会社説明でワコールの目標が世界中の女性を美しくすること、社会のために貢献することだということを知った。この目標を実現するために、ワコールは人体の形状に関する研究を非常に重視している。「人間科学研究所」では三次元の人体計測システムを使って毎年1000名前後の4歳から69歳までの女性のデータを収集し、年齢による人体の形状の変化を理解し、年齢ごとの女性の体型を割り出し、どの女性にも合った下着の開発に取り組んでいる。また、人が動いているときの体の形状の変化に関する研究にも力を入れ、運動に適した下着の生産を行っている。

ブラジャーといえども、すべての女性に美しい下着をつけてもらうために、多くの技術が使われていることを知った。「人間科学研究所」の膨大な量の研究と技術開発はもとより、ブラジャーの製造工程も印象的だった。ワコールのブラジャーは40余りの部分から構成され、手縫いで作られていた。品質を保証するために、ワコールでは自社基準を設けて、一枚一枚ブラジャーの品質をチェックしてから市場に出している。販売面でもワコールは行き届いたサービスを心がけ、顧客にどんどん試着してもらって自分に合った下着を見つけてもらうことを心がけている。自分に合った下着が無くてもガッカリすることはない。ワコールなら三次元計測システムを使ってオーダーメイドしてくれるのだ。3週間で顧客の元に届けられるという。

まさにこうしたワコールの優れた製品とサービスによって、創業約60年という企業が国際市場に参入し、「多様化された、地球的規模の国際的な大企業」となることができたのだと思う。また、ワコールは1980年代から中国市場に参入し、中国消費者のニーズに応えることを目的に、上海に目下海外唯一の研究所である「中国人体研究所」を設立している。そこでは主に中国女性の体型を分析し、新しい機能を持った製品を開発し、製品の効果に関する研究と評価を行っている。こうしたことからもワコールが

中国市場を非常に重要視していることが分かる。

私たちはワコールの目標がもう一つあることに注目した。それは社会のために貢献し、社会的責任を果たすという目標である。ワコールは2002年からがん予防のピンクリボン運動に参加し、乳癌のために乳房を失った人たちのための下着の生産に力を入れているほか、多くの公益事業も行っている。

知っていますか？

見学の後、ワコールの人が私たちの質問に熱心に答えてくれた。例えば次のような質疑応答があった。

問：見学ではいろいろな女性用製品を見ましたが、男性用の製品は生産していないのですか。

答：設立当初は女性用の下着だけを生産していましたが、60年の間に会社も大きくなり、女性用製品の種類も非常に豊富になりましたが、今は男性用製品も開発しています。例えば、脂肪を燃焼させて太りにくくするような男性用下着を生産しています。

問：国際的な下着ブランドはいろいろありますが、ワコールを成功に導いた強みは何でしょうか。

答：わが社の強みは次のとおりです。①国や地域の民族・種族・地域・文化に基づいてそれぞれ異なる下着を開発し、どの市場にも一律同じ製品を販売するということはありません。②人体の科学的研究を非常に重視しています。本社の「人間科学研究所」は45年の歴史があります。③このように長期的に人体に関する科学的研究を行っているところはわが社だけです。以上の3点を心がければ、すべての女性に合った下着が生産できると信じています。

アッという間に2時間の見学が終了した。見学時間は短かったが、多くのことを学ぶことができた。最後にこのような貴重な機会を与えてくれた中国日本商会、日中経済協会と中日友好協会に感謝すると同時に、ワコール社の温かいもてなしと会社紹介に感謝したい。将来、また日本に来る機会を見つけ、日本の先進的な技術と管理手法を学び、中国の建設に貢献したいと思う。

科学技術に裏打ちされた品質と優れた管理方式で市場を開拓
――三菱電機稲沢製作所を見学して

中国石油大学（北京）学生代表

見学日時：2009年10月21日15:00～17:00
見学場所：三菱電機稲沢製作所

企業概況

三菱電機株式会社は1921年1月15日に設立され、家電・電子デバイス・重電システム・工業自動化システム・情報通信システムの開発と経営が一体化された総合的な大手グループ会社である。2008年3月末現在の三菱電機株式会社の総資産は3,485,080百万日本円、グループ全体の売上は4,049,818百万日本円、グループの総従業員数は105,651人である。85年に及ぶ変遷のなかで、三菱電機は常に先端技術と新技術の研究開発に力を注ぎ、高性能製品及びシステムの開発と製造に取り組んできている。

三菱電機は世界的なネットワークを構築し、傘下の会社や研究機関及び製作所の一体化を図り、各事業部門に対し技術情報や資料を提供している。同社の対中事業は中国の発展スピードに合わせながら徐々に展開され、現在の規模にいたる。2007年7月現在、三菱電機の中国における合弁企業と独資企業は27社を数える。三菱電機（中国）有限公司は1997年10月に設立されて以来、傘型会社として対中国の窓口となり、中日間の経済発展のために貢献している。

三菱電機稲沢製作所は1964年に設立された、エレベーターとエスカレーターの開発・製造が主力の研究及び生産工場である。稲沢製作所はその半世紀に及ぶ歴史のなかで、三菱電機の先進コア技術を用いて各種の高効率で省エネかつ快適なエレベーターとエスカレーター、さらにはエレベーターの安全性を高めるためのシステム等を開発・製造し、「品質第一にエレベーターの効率性・安全性・快適性を高める」を企業理念とし、“Changes for the Better！”を信念に、三菱電機稲沢製作所は世界でも有数のエレベーターメーカーへと成長してきた。

見学内容

日本に行く前から三菱電機という会社があることは知っていたが、そのハイテク技術と高品質の製品についてはほとんど知らなかった。車から降りると、工場周辺はきれいに区画された美しい水田が広がっていた。重工業メーカーの周辺だというのにまったく汚染の形跡がなく、同社の環境への配慮が見て取れた。青い空、輝く陽光、白い雲、黄金色の稲田が日に照らされて輝いていた。日程が知らされていなければ、稲沢製作所に着いたとは分からなかっただろう。

まず、稲沢製作所の整然とした事務棟に入った。そこにはユニークな形をしたエスカレーターがあった。案内の人が「これは三菱電機稲沢製作所自慢のスパイラルエスカレーターです。独特の造形と応用上の要求により相当の技術が必要になります。このような製造コストの高いエスカレーターを製造できるのは世界でも三菱電機だけです。現在、中国では上海新世紀商場と広州国際商易センターがこ

の種のスパイラルエスカレーターを使っています」という説明があった。訪日団メンバーの誰もがこのユニークなエスカレーターを珍しがり、次から次へとエスカレーターの乗り心地を試していた。

次に私たちは会議室に案内された。副工場長から三菱電機株式会社及び稲沢製作所の概要について熱心な説明があり、その発展の歴史と管理理念及び製品技術等の概要を理解することができた。その後、私たちは2つのチームに分かれ、技術スタッフの後について工場内を見学した。エレベーターのかごの製造工程、モーターの製造工程、組立て梱包工程を順番に見て回った。エレベーターかご用鋼板のプレス・切断・研磨・補強・穴あけ・電気メッキ/溶接・錆び防止塗料などの一連の工程と技術について説明を受けたほか、単純作業の生産ラインも見学した。人にやさしい管理手法や自動化による生産効率の高さを目の当たりにし、その先進技術の一端に触れることができた。

次に工場エリアを出て、エレベーターの開発・テスト用に建設された「SOLAE」試験搭を見学した。「SOLAE」試験搭の外壁は全面白タイルで覆われていたが、少しも汚れていなかった。こうした稲沢製作所の徹底した環境意識が印象的だった。塔高173メートル、敷地面積440平方メートル。まず展示ホールを見学した。これまでに三菱が研究開発した顧客のさまざまなニーズに合わせた各種エレベーターが展示されていた。中でも印象深かったのは、三菱によって研究開発された新技術「永久磁石同期電動機」の安定性だった。それは永久磁石とローラの活性を活用することで大出力を可能にした巻上機であり、三菱電機独自の技術である。私たちは台の上に立ち、コップの水を使って安定システムを搭載したかご内の振動と安定システムが搭載されていないかごの振動をそれぞれ体験することになったが、三菱電機が開発した安定システムの効果は歴然だった。

次に超高速エレベーターに乗って試験塔の最上部まで上り、三菱電機の安全かつ快適、高効率のエレベーターを体験させてもらったが、安定した乗り心地にびっくりした。170メートルを超える塔の最上部に立ち、窓から美しい景色を眺めていると、心まですっきりしてくるような気がした。

試験塔の次にエレベーターの安全管理システムを見学した。このシステムを使えば、各エレベーターの運行状況を正確に知ることができるほか、故障が発生しても随時対応できるとのことだった。また、さまざまに外観設計されたエレベーターを見学した。どれも顧客のニーズに合わせ、臨機応変で人にやさしい設計になっていた。

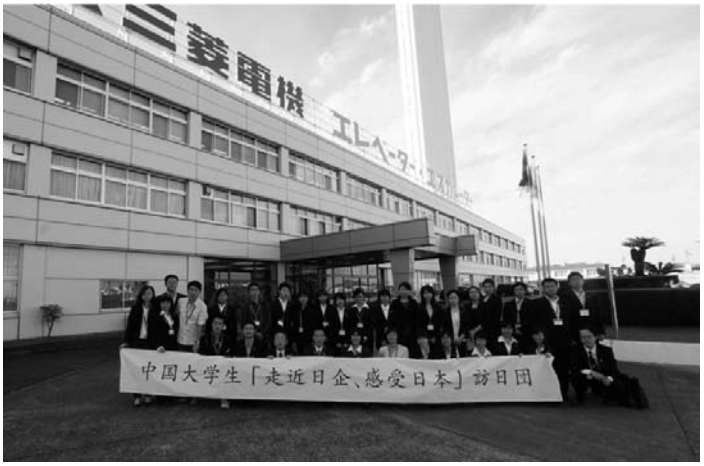
見学が終わると、会議室に戻り、見学中に気になった問題についていくつか質問した。技術スタッフが丁寧に答えてくれたお蔭で、私たちの疑問が次々に解消されていった。例えば、従業員の福利厚生や技術研修、顧客のニーズをどのように満たしているのかなどに非常に興味があったが、案内役の人が人にやさしい管理手法の具体的な制度をいくつか紹介してくれた。優秀な社員の表彰、福利面の充実、社員研修の強化など、従業員のモチベーションを上げることで仕事の効率アップを図っているとのことであった。また、三菱電機はエレベーターの能性確保を前提に、可能な限り顧客のニーズを満たし、絶対的な安定性と快適性を実現しているという点が特に強調されていた。

見学後の感想

夕日が西の空に沈むころ、私たちを温かく迎えてくれた人たちに別れを告げ、稲沢を後にした。

三菱電機稲沢製作所のエレベーターとエスカレーターの製造面の優れた技術が印象的だった。基本となるかごの設計から新技術の牽引駆動装置や安全性向上のための管理システムにいたるまで、またどの製造工程にも日本人のきめ細やかな業務態度とものづくりへの意欲が表れていた。小さなことでは研磨作業から大きなことでは設備の改造、環境保護にも心を配るなど、あらゆることの細部まで配慮が行き

とどいていた。こうした管理手法と発展理念があったからこそ今日の三菱電機があるのだろう。私たちが学ぶべきは三菱電機の技術イノベーションだけでなく、その管理理念や常に顧客の立場に立つという姿勢だ。良い点をどんどん吸収し、海のように大きな包容力でさまざまなものを受け入れてこそ中国工業もその発展を促進できるのだと思った。



知恵と奉仕の精神を体現する日本の農産物集散地
――JA遠州中央園芸流通センターを見学して

首都師範大学：邵玉珊　王邸玥

見学日時：2009年10月22日13:15～14:15
見学場所：JA遠州中央園芸流通センター

静岡県磐田市に位置するJA遠州中央園芸流通センターは遠州中央農業協同組合の拠点である。農産物の集荷と卸売のための場所として2003年に設立され、運営資金は国と地元によってまかなわれている。

訪日4日目の10月22日、私たちは浜松市から磐田市に向かった。道中、景色が徐々に鉄筋コンクリートの工場群から緑美しい森林や田畑に変わり、まるで一陣の春風が吹き過ぎたように心が軽くなるのを感じた。

農林技術研究所へ向かう途中、JA職員の遊び心に触れることができた。建物の壁にペンキで野菜や果物の絵が描かれていたのだ。カラフルで可愛らしい絵だった。車の窓越しにこの楽しい絵を写真に収めたが、何とその建物が見学先の園芸流通センターだった。

皆さんは日本人の勤労精神に触れたことがあるだろうか。園芸流通センターについて紹介してくれた大橋弘和さんを見て日本人の仕事に対するまじめな態度を実感した。大橋さんは私たちに野菜の説明をしてくれたが、いつも私たちが説明を受ける場所に着く前に、広い野菜の出荷場や育苗場の中を走り回って箱詰めにされた野菜や育苗中の種を準備してくれた。

大橋さんによると、JA遠州中央は120種類の野菜を扱っており、東京・北海道・大阪・名古屋など全国60の市場に向けて出荷しているそうだ。2007年の売上高は前年比95.9％増で1千万円を超えた。野菜は一般に、朝、箱に詰められ、午後にはトラックに積み込み、翌日の朝には目的地に着く。

白ネギ・海老芋・中国野菜（中国から導入した野菜をいう）が同センター自慢の野菜だ。JAの職員がちょうど野菜を箱に詰めて卸売業者のところへ配送する準備をしていた。野菜はレストランやスーパーに卸売業者から運ばれることになっている。野菜の箱がトラックに整然と積まれ出発を待っていた。

海老芋は毎年2回（3月と10月）収穫され、その80％が高級食材として使われている。大橋さんは「大きな海老芋と小さな海老芋がありますが、私たちは子芋、孫芋と呼んでいます」とユーモアたっぷりに説明してくれた。ある団員が「お母さんはどこにいるのですか」と質問すると、大橋さんは少し考えて「お母さんはまだ畑の土の中です。お母さん芋を売ってしまったら大変です」と答え、みんなの笑いを誘った。JA遠州は日本で唯一機械を使って海老芋を大きさによって選別しているほか、日本でもまだ珍しい機械による白ネギの泥の除去や皮むきを行っている。

海老芋と白ネギを見学した後、中国野菜の箱詰め作業場を見学した。中国野菜は検査を受け、箱詰

めされた後、冷蔵庫に保存されるが、この一連のプロセスが自動化されていた。また、野菜の箱を運ぶ小型クレーンには可愛らしいキャラクターが描かれていた。JA職員のこうした遊び心にまた心が動いた。最後の質疑応答の時にどうしてキャラクターを描いているのかと大橋さんに質問したところ、「機械というのは冷たい感じのするものなので、キャラクターを描くことで温かみを与えているのです」という答えが返ってきた。

高い技術レベルを備えたものとしてはLED室があった。冷蔵庫のような箱がピンク色の光を放っているのを見て、野菜の遺伝子が突然変異を起こすのではないかと心配したが、大橋さんは「そんなことはありません。この光は花を早く咲かせるためのものです。花が咲いたら苗を土に移します。こうすると、根の部分が食べられる頃には花が散るということもなく、やわらかい花を食べることができるのです」と言う。それでも長時間人工の光に照らされることによる副作用の懸念をぬぐい去ることはできなかったが、消費者のニーズを大切にする日本人の考え方を垣間見る思いがした。

農林技術研究所が農産物の新技術を研究するための研究センターだとすれば、園芸流通センターは農産物のための集散センターだ。どちらも農家のための施設で、農家のことを第一に考えている。農業をする人や産出される農産物が減り、研究所や流通センターも「後継者問題」に直面している。こうした私利私欲のない事業には私利私欲のない精神が必要で、後継者探しが難しくなっている。流通センターは収益のわずか8.5％を費用として徴収し、残りはすべて農家の収益となる。

中国のここ数年来の新農村と比べ、日本の農業は技術や機械化という面だけでなく、農家の人たちの資質や農産物の安全・流通面でもはるかに中国の先を行っている。JA遠州中央の園芸流通センターを見学して、その先進的な農業に驚くと同時に、両国の差を改めて感じ、祖国の建設のために力を尽くしたいという思いがにわかに沸き起こってきた。これから自分がどのように、どのような方面で社会に貢献していくことができるかを考える非常に良いきっかけとなった。こうした取り組みは今後中国が先進的な農村を築いていくうえでの目標になると思う。

三菱化学：Good Chemistry for tomorrow

北京化工大学学生代表

見学日時：10月23日（金）10:00～12:30
見学場所：三菱化学株式会社 本社
東京都港区芝4-14-1 三菱ケミカルホールディングスビル

見学概要

三菱化学に到着すると、案内役の小林さんが三菱化学について紹介してくれた。

三菱化学は日本の大手化学メーカーの一つで、1994年10月1日に三菱化成と三菱油化が合併してできた会社である。持株会社である三菱ケミカルホールディングスは、三菱化学と医薬品の田辺三菱製薬、樹脂製品を扱う三菱樹脂の3つのコア企業からなり、その売上高は日本の化学業界のトップを占める。

三菱化学は日本最大の化学メーカーであり、①機能材料及びプラスチック製品（情報電子製品、化学品、製薬を含む）、②石油化学工業、③カーボン及び農業製品の3事業を通して多くの製品を提供している。アルミ、プラスチックフィルム、プラスチック包装などの機能材料が売上高の55％以上を占めているが、同社の長期目標は化学品と製薬に重点を置いている。現在、構造改革と管理面の改革によって収益アップが図られている。

三菱化学グループは1950年に誕生し、すでに57年の歴史がある。石油化学、機能製品、衛生・保健分野を支柱に傘下企業は371社を数える。そのうち113社が世界17カ国で業務展開しているグローバル企業である。売上高は2兆6000億円に達し、日本トップ、世界第5位の総合化学メーカーである。1963年から中国へ肥料を輸出し始め、1972年には中国香港に現地法人を設立している。以来、製品の加工を中心に中国業務を展開しているが、今では業務範囲をPP混合物や医薬品分野にまで広げている。

小林さんの説明の後、三菱化学のケミストリープラザを見学することになった。中国人社員の孫佩莉さんの案内で技術プラットフォームゾーン、テーマゾーン、ソリューションゾーン、APTSISゾーンを見学した。テクノロジープラットフォームゾーンは9つに分けられ、石炭化学、無機化学、生命科学、有機化学、ポリマー、加工技術、生産技術、分析解析などの応用事例がさまざまな角度から紹介されていた。ソリューションゾーンは電子情報、土木建築、食品などで、いくつかのマーケットを通して各種応用事例が紹介されていた。確かな基礎技術に裏打ちされた多彩な高機能商品が展示されていた。テーマゾーンには化学によってその姿を変えた未来型自動車が展示され、三菱化学の将来を見据えての戦略が紹介されていた。APTSISゾーンには白色LED、ハイブリッド車用リチウムイオン電池、自動車用化学工業材料、持続可能な資源、有機光電半導体、有機太陽電池、個別化医療の7つの重点育成事業が展示されていた。このAPTSISゾーンは三菱化学中期経営計画においては中核となる部分であり、三菱化学が未来を見据えて展開している各種技術イノベーションの一端を知ることができた。

知っていますか？

三菱化学の先進的な科学技術とすばらしい企業理念が印象的だった。見学のなかでいくつか疑問も生じたが、三菱化学の社員が私たちの質問に丁寧に答えてくれた。

Q：化学メーカーの汚染は深刻だと言われていますが、三菱化学の化学工場や製薬工場の周辺環境の汚染

状況はどうですか。こうした工場を海外に移し、「汚染転嫁」することで自国の環境保護規制から逃れるといったようなことはありますか。
A：そういうことはありません。三菱化学の工場の煙突から出ている煙は排ガスではなく水蒸気です。三菱化学は環境保護を最優先課題とし、発生した廃棄物はすべて厳しい処理を行ってから排出しています。海外にある工場もすべて現地の環境保護要件を満たしています。要求以上の環境保護対策をとっているところもあるぐらいです。
Q：C4材料は日本では幅広く応用されていますか。中国の状況はどうですか。
A：日本では非常に幅広く応用されていますが、中国ではあまり応用されていないようです。これは中国の企業がまだC4技術のいくつかのボトルネックを解決できていないからだと思います。例えばカーボンファイバーですが、長さや細さという点でまだ不十分です。これがC4材料の中国での普及にとって大きな制約となっています。
Q：中国人社員はどのようなポストに就いていますか。コアテクノロジーの部署で仕事をしている人はいますか。
A：中国人社員の多くはマーケティングや広報などの部署で働いています。コアテクノロジーに関わる仕事をしている人はごくわずかです。

感想

2時間半という見学時間は、三菱化学の長い歴史にとってみればほんの一瞬だ。この短い時間で同社の企業精神を深く理解しようと思っても無理なことではあるが、それでも私たちが学ぶべきところ、考えなければならないことがいろいろあった。

中でも最も印象深かったのは三菱化学の社員たち自ら生み出した言葉「APTSIS」だ。見学のときも説明があったが、「Agility―俊敏に、とにかく速く、Principle―原理原則・理念の共有、Transparency―透明性・説明責任・コンプライアンス、Sense of Survival―崖っぷちにあるという意識・危機感、Internationalization―グローバル市場でのパフォーマンスの向上、Safety, Security & Sustainability―製造における安全、品質における安心、情報セキュリティ及び環境対応」という意味である。

企業として、透明で公正な企業文化をベースに常に技術を磨き、絶えず新しいものを創造し、魅力ある価値を提供し、世界の発展に貢献し、なおかつ地球環境との共生、安心・安全を基本とした社会的責任を果たす。これらを実現するのにどれだけの使命感と、どれだけの努力が必要になるのだろうか。今、中国は経済の高度成長期にあるが、企業によっては利益の最大化だけを追求し、自身の向上と社会的責任をないがしろにし、環境破壊をもたらし、自身の長期的発展を阻害している。こうした状況が今も繰り返されているが、こうしたことを回避するにはどうしたらよいのか。国外に目を向け、外国の良いところをしっかりと学び、自身を考えるということが必要なのではないだろうか。

三菱化学の共通の理念「Good Chemistry for tomorrow」のように、もっと未来に目を向けるべきだと思う。中国企業も長期的な視野に立って、自身の責任をしっかりと担い、自身の向上のための努力を惜しまず、社会に貢献し、美しい未来のために積極的に努力していってほしいと思う。

欢迎中国大学生
近日企、感受日本
2009年10月23

安全・安心・CSR

北京語言大学学生代表

見学日時：2009年10月23日（木） 13:30～15:30
見学場所：東京海上日動火災保険株式会社　本社（東京都千代田区丸の内1-2-1）

東京海上は日本で最大かつ最も歴史のある損害保険会社である。36の国と地域の300余の都市にネットワークを持ち、海上保険市場において常に世界トップの座を占めている。

東京丸の内にある本社ビルを見学していろいろと見聞を広めることができたが、その強大な経済力には驚かされた。ロビーのショーケースには会社創立時の登記書や旧館完成時の写真が飾られ、同社の発展の歴史が紹介されていた。東京海上グループは20年ごとにより広い分野を目指し、その時そのときの世界の状況と趨勢を見ながら発展目標を打ち出してきた。1980年のキャッチフレーズは「大衆化と自由化の時代を迎える」というもので、2000年以降は世界の保険業界のリーディングカンパニーとなることを目標に努力を続けている。

永野毅常務取締役が同社の歴史と概況について紹介してくれた。

東京海上保険会社は「日本近代経済の父」と呼ばれる渋沢栄一氏によって設立された日本初の保険会社であり、以来、常に日本の損保業界のリーディングカンパニーとして世界トップクラスの地位を確立している。統合や再編を経て、東京海上日動は日本最大の保険会社としての地位を不動なものとし、国内事業に加え海外事業にも力を入れている。

東京海上日動は「お客様の信頼をあらゆる事業活動の原点におき、『安心と安全』の提供を通じて、豊かで快適な社会生活と経済の発展に貢献する」をその経営理念に掲げている。つまり同社は保険会社としてできる限り顧客のリスクを減らし、顧客に安心と保障を与える会社であり、こうした経営理念を堅持してきたからこそ、今日の激動する世界経済の中にあってもすばらしい営業成績をあげているのだと思う。

次のような同社の行動指針が特に印象に残った。

・　お客様に最大のご満足を頂ける商品・サービスをお届けし、お客様の暮らしと事業の発展に貢献します。

・　収益性・成長性・健全性において世界トップクラスの事業をグローバルに展開し、東京海上グループの中核企業として株主の負託に応えます。
・　代理店と心のかよったパートナーとして互いに協力し、研鑽し、相互の発展を図ります。
・　社員一人ひとりが創造性を発揮できる自由闊達な企業風土を築きます。
・　良き企業市民として、地球環境保護、人権尊重、コンプライアンス、社会貢献等の社会的責任を果たし、広く地域・社会に貢献します。

東京海上日動は顧客・株主・代理店・社員・社会の5つをステークホルダーと位置づけ、それぞれの利益バランスをとりながら経済の発展と社会の繁栄に貢献し、価値ある商品とサービスを提供している。これは同社が常に堅持してきた原則であり、これこそが長い間社会の各方面から信頼を得て、競争の激しい保険業界のトップを走ってくることのできた所以なのだと思う。

東京海上日動と言えば、その海外事業について触れないわけにはいかない。2009年現在、38の国と地域399都市に拠点を設け、従業員数は1万4773人にのぼる。その内訳は日本からの駐在員数173人、現地従業員数1万4600人となっている。

2000年当時の海外事業関連のデータ（41の国と地域、110都市、駐在員数143人、現地従業員数1690人）と比較してみると、2000年には1690人であった現地従業員の数が、2009年には1万4600人と飛躍的に増加していることがパンフレットを見て分かった。これは同社が海外の人的資源の開発を重視していることの表れである。海外事業を展開する都市の数も110から399都市に増えており、今も発展拡大を続けている。

東京海上日動のCSRプロジェクト

事前に配られた資料に目を通しながら永野毅常務取締役の話に耳を傾けているとき、日本語資料にあった一文に目がとまった。

「私たちは企業活動を通じて様々なステークホルダーの皆様から信頼をいただき、永続的に『世の中になくてはならない企業グループ』となることを目指し、CSR活動を続けてまいります……」

CSRという3つのアルファベットを見ても初めは何のことかわからなかったが、後になって「Company Social Responsibility」（企業の社会的責任）の略語であることを知った。このとき初めて「企業の社会的責任」という概念を耳にした。恥ずかしいことに、中国には「企業の社会的責任」を明確に提示している企業がほとんどなく、それを実践に移している企業となると、さらに少ない。

一方、東京海上日動は早い時期からCSR関連の取り組みを行っている。「東京海上グループCRS憲章」を定め、2007年にはCSR推進の専任部署として「経営企画部CSR室」を設置している。2009年を例に挙げると、「みどりの授業」の実施や「こども環境大賞」の創設、東南アジアにおけるマングローブ植林プロジェクト（「マングローブ植林100年宣言」のもと、その植林面積は2009年3月末時点で5901ヘクタールにのぼる）、東京大学と共同で行っているリスク研究などを通して、「地球環境保護」の行動指針を実行に移している。また、教育振興基金を設けて教師や自動車事故で両親をなくした子供を経済的に援助したり、日本国内及び海外からの留学生に奨学金を提供したり、「JOCジュニアオリンピックカップ水泳競技大会」の後援を行ったりと、さまざまな支援を通じて同社の「社会に貢献し、かつ人材を育てる」という目標を実践している。

東京海上日動の見学で最も驚いたことは、同社が本業の日本国内及び海外の損害・生命保険事業以外に、青少年の育成と環境分野でも多くの貢献をしているということだった。自社の利益を考えるだけでなく、社会事業や公共事業にも力を注いでいるわけだが、まさにこの点が中国企業の足りないところではないかと思った。

藤田桂子さんが流暢な中国語で説明してくれた「環境保護事業は企業の重要な責任であり義務である」という環境理念が特に印象に残った。同社はこの理念に基づき以下のような環境方針を定めている。①本業である保険事業を通して環境保護活動を展開する（例えば、保険契約の約款を「紙からWeb方式」に切り替えることを推奨する「Green Gift」プロジェクト。Web約款の契約1件につきマングローブ2本相当の金額をNGO等に寄付し、約款作成に要する大量の紙資源を削減すると同時に、湿地の緑化事業に大きく貢献している）。②会社の事業活動における環境負荷を削減する。③環境教育活動と社会貢献活動を広く展開する。東京海上日動はこうした一連の環境保護活動を通して良性循環をベースにした環境保護のためのネットワークを構築し、企業の経済活動が自然環境に対し温室効果ガスなどの負荷が一切かからないようにしているが、この点からも同社の環境保護意識を十分に見て取ることができる。

以上のようなことを見聞し、日本企業のすばらしさを実感した。彼らの視線は日本や目先の利益だけでなく、地球全体の環境保護や将来に向けた人材育成に向けられ、それにより日本企業を人間本位の考え方に溢れたものにしている。こうした企業は社会貢献ということ以外に、間違いなく社会の信頼と尊敬を得ることになるだろう。しかも、こうした信頼と尊敬は非常に貴重なものであり、金銭では買えないものである。いつの日か、中国企業も企業としての社会的責任を果たせるだけの余力や意志、自信、根気を以って、環境保護意識や人間本位の考え方をその企業文化の中に根づかせることができればと思った。

謙虚な英雄――三菱商事訪問記

中国石油大学（北京）

見学日時：10月23日16:00～19:30
見学場所：三菱商事（株）本社

三菱商事の見学を終えて思ったことは、「控えめな宣伝と壮大な経営」に尽きる。恥ずかしいことに、これまで三菱商事という会社を知らなかったが、今回の見学を通してさまざまな気づきがあった。その規模と多様な業務範囲は私たちの想像を超えるもので、まるで日本全体を独占してしまうのではないかとさえ思えるほどだった。

三菱商事の概況

三菱商事の歴史は1870年の九十九商会にまで遡ることができる。海運業から始まり、これまでに何回もの合併と再編が行われ、第二次大戦後は事業を100余りの独立した企業に分散させたが、その後1954年に総合商社としての三菱商事が誕生し、それが現在の三菱商事の基礎になっている。

三菱商事には全部で6つの事業部門があり、全世界に1万社もの顧客を持つ。また、海外80カ国に200の支店を設け、持株会社は500社、総従業員数は6万人を超える。連結財務諸表の純利益は3699億円で、売上高はその年の日本政府予算の1/3に相当する。三菱商事の事業内容は貿易や投資など多方面にわたっている。今や世界的な総合事業型企業となり、その事業は金融・エネルギー・金属・機械・化学・食糧に及ぶ。三菱商事は世界的な総合商社として合併経営をベースに自らの価値を高めることで持続的な成長を図ると同時に、社会の持続的発展にも貢献している。

また、同社は公明正大かつ品格ある経営という信念を以って自らの発展を促進し、より美しい社会を創造するための貢献に邁進している。三菱商事の三綱領（所期奉公・処事公正・立業貿易）の精神は経営陣や社員全員の心に深く刻まれ、三菱グループの経営の根本理念となっている。

中国における三菱商事

三菱商事は日本の大手企業として中国企業と長期にわたり友好的な関係を築いてきている。同社は「誠実」という経営理念によって対中貿易において独特の存在感を示すと同時に、中日貿易においても「企業には社会的責任がある」という理念のもと、常に社会の繁栄と進歩、発展のために貢献してきた。例えば、現代的農業の普及に努め、ユニセフの活動を支持し、教育事業の資金援助をしているが、そうした活動が認められ、同社のトップは何度も中国の国家指導者に会い、高く評価されている。

三菱商事株式会社は1980年に北京に駐在事務所を設立して以降、中国各地の顧客と日本をはじめとする世界各国との貿易・投資活動の仲立ちをしてきたが、中国の改革開放が進み、現地化の条件が整うのに伴い、三菱（中国）投資有限公司（現在の三菱商事(中国)有限公司）が設立されるにいたった。

実際に見た三菱

東京海上日動を出て三菱商事に向かったときは既に16:00を回っており、あたりは薄暗くなっていた。両社は隣どうしだったので、忙しそうに歩く人々と立派なビルを見ながら歩いて移動した。ビルの大き

さも企業の実力を表しているのかもしれない。

三菱商事の玄関に着いた。立派なビルで、圧倒された。中は広々とし、清潔で整然としていた。警備員の厳しい表情を横目で見ながら、団員一同少し興奮気味に玄関ホールで待った。それぞれ入社許可証をもらい、カードを機械にかざして中に入った。セキュリティの厳しい会社のようだ。そうでなければとっくに私たち代表団を中に入れていてくれていたはずだ。会議室に落ち着くと、日野正平さんが会社の概要について説明してくれた。日野さんは中国語が上手で、話も要領を得ていた。予定より遅れて着いたからといって、見学の時間を延長するということはなく（日本人の時間の観念は厳しい。遅刻すると、日本人は機嫌が悪くなることもある）、時間通りに今日の任務を終了させることになるだろう。簡単な自己紹介の後、日野さんと私たちの交流が始まった。日野さんから企業名を書いたリストが渡された。日野さんは私たちにどの企業が三菱グループに属しているか答えさせ、私たちがどの程度三菱について理解しているかを見た。日野さんの話はユーモアがあった。団員が答えるたびに点数をつけて、正解率がどれくらいだったかを教えてくれた。答えが出るたびに日野さんは三菱商事についてのあれこれを話してくれた。例えば三菱グループの三大巨頭が三菱重工、三菱東京UFJ銀行及び三菱商事であることを知った（初めて知った）。また株式会社三菱鉛筆は名前に三菱がついているが、三菱グループでないこと、逆に日本郵船には三菱という文字が入っていないが、三菱グループの重要な一員であることをも分かった。

こうした交流があった後、日野さんから三菱グループの今後と現状についての紹介があった。三菱グループというように呼んでいるが、誰もが想像するような持株会社の下にグループの子会社を置くというような体制ではなく、三菱グループの各企業は株を互いに持ち合い、互いに互いの株主になっている。企業同士の取引は密接で、調達の際は優先的にグループ企業の製品を選ぶ。各企業はその規模に関わらず平等の関係にある。各企業の責任者は毎週金曜日に例会を開いて情報を共有しているとのことだが、それはとても良いことだと思った。企業同士が兄弟のように互いに学びあい、問題があれば共同で検討することができる。例えば今回の金融危機などでも、必要があれば、企業同士で連携しあい共同でリスクに対処することもできる。情報と販売ルートの共有によって企業は競争力を高め、それはより大きな市場シェアを占めることにもつながる。会社が成功したカギを訊いてみた。日野さんから「三つの宝があるからだ」という答えが返ってきた。つまり人材・資金・全世界に張り巡らされたネットワークの3つだ。時間の都合で、三菱商事の公益分野での貢献についての説明は割愛されたが、インターネットで調べてみたところ、「INNOVATION2009」に以下のような社長の言葉があった。CSR、特に環境分野においては、企業が積極的な役割を担うことを時代が求めている。三菱商事の【三綱領】に「所期奉公」という方針があり、同社は社会の持続的な発展に資する事業に尽力する必要性を十分認識しており、環境保護と企業の社会的責任を非常に重視し、積極的にそれに取り組んでいる。これらの公益活動のうち、私たちが注目したのはアーティストの育成と外国人留学生のための奨学金である。三菱商事は1991年から世界の指導者になるような傑出した外国人留学生を経済的に援助することを目的とした奨学金制度を創設しているほか、中国対外経済貿易大学と北京師範大学にも国際奨学金制度を設けている。こうした三菱商事の公益事業は一挙両得のように思われた。社会貢献と同時に、大学生や優秀な人材の間で自社の知名度を上げることができ、将来優秀な人材が集まるための準備をしているとも言えるからだ。

日野さんは次に三菱商事のビジネスモデルについて紹介してくれた。最初からビジネスモデルがあったのか、それとも良性循環が自然に形成されたのかは分からないが、三菱商事のビジネスモデルとは、つまり提携パートナーとの間にウインウインの関係を実現することでバリューチェーンの全体的なレベ

ルアップを図り、それにより利益を得るというものだ。一つの業務というだけでなく、産業チェーン全体に投資するのである。川上の原材料から川下の販売にいたるまで、これまでに培った世界的なネットワークを使って資源を統合し、販売していくのである。この手法は大幅にコストが節約できるだけでなく、他の企業にはまねのできないルートの強みを持つことになり、それによって価格面の優位性と市場面の優位性が形成され市場の勝ち組となる。資金がネットワークをさらに充実させ、ネットワークを充実させることで逆に資金の増加が刺激される。こうして企業は良性循環を形成することになる。その後の説明の中で、日野さんは再三謙虚さや控えめであることの必要性について強調していたが、三菱商事の発展振りを見る限り、その実力が自ずと見て取れる。三菱商事はすでに製鉄・LNG・自動車・食糧・食品・化学品などさまざまな分野でバリューチェーンを形成しているが、将来は強大な力を持つ企業帝国を形成するのではないかと思った。

三菱商事の歴代社長を心から尊敬する。一体どのようにしてさまざまな分野でこのようなすばらしい成果を挙げることができたのか。きっと勇気のある、長期的視野に立った、判断力と実行力のある人たちだったに違いない。中国について考えた。中国も近い将来、同じように優秀な人材が企業を経営し、中国企業を強大にしていくことであろう。

日野さんは急いで説明を終わらせた。質疑応答の時間がなかったが、夜の懇親会の時に質問の機会があるとのことだった。懇親会では上海出身の人事担当者に会うことができた。私たち石油大学の学生と親しく話をしてくれた。その後、日野さんも私たちの話の輪に加わり、エネルギー問題について語り合った。最後は石油大学の学生としていつか私たちの学校を訪問してくださいとお願いしたが、それは私たちなりの今回の訪日を通しての石油大学への貢献であったと言えよう。

三菱商事の印象

三菱商事の見学は私たちにとっては驚きであり、目の前の視界がパッと開けたような気がした。ふだんはあまり目立った動きはないが、実は水面下にその巨大な体躯が隠されており、表に表れているのは氷山の一角である。三菱商事は巨大な帝国だ。彼たちは認めないかもしれないが、事実が証明している。自身の優秀さゆえに自らの成長をコントロールすることができずに、国全体を独占してしまうようなことになりはしないか。三菱は人に畏敬の念を与え、私たちはそれを仰ぎ見ることになる。自分の祖国にもいつの日かこのように優秀な企業が育ってほしいと思う。

集合写真

懇親会を終えて

JAL見学記

首都師範大学：劉吉　于阿楠

見学日時：2009年10月27日09:30～12:30
見学場所：JAL

中国から日本に行くときに乗ったのは日本航空の旅客機だった。つまり、私たちはすでにJALのサービスを体験していたことになる。そうした意味で、今回の見学には大きな期待を寄せていた。この日本最大の航空会社を自分の目でしっかり見てみたいと思った。

まず、JALの社員が会社全体の状況や飛行機についての説明をしてくれた。ユーモアたっぷりの話し振りと工夫を凝らしたパワーポイント資料のおかげで、リラックスした雰囲気の中で日本航空の沿革、企業理念、行動規範、運航状況などについての概略をつかむことができた。説明によれば、日本航空は1951年8月に初の民営航空会社として設立された。日本ひいてはアジアで最大級の規模を持つ航空会社の一つであり、その運航路線はアジアの各地域をカバーしている。中でも羽田空港の利用客数は世界第4位であり、毎日数千万人の乗客が利用しているという。ちなみにあれ程多くの人が利用している中国首都国際空港でさえも第9位にとどまっている。日本航空は1974年から中国への運航を開始し、日本－中国間の往来に大きく貢献している。

説明に続き、ワークショップ形式によるディスカッションが行われた。講師が航空機全体の構造や使われている素材、離陸の原理などを熱心に解説してくれた。物理を専攻しているわけではないので、その方面の知識はなかったが、おかげで思いがけず今まで触れたことのない知識を得ることができた。印象的だったのは、講師とのコミュニケーションは全て通訳を介して行われていたにもかかわらず、お互いの間に距離感が微塵も感じられなかったことだ。それどころか、このわずか数十分間の航空に関する講義内容は、高校時代の物理の授業よりもはるかにすんなりと頭に入ってきた。これからもこういったチャンスを見つけて自分の知識を増やしていきたいと思った。

見学に先立ち、日本航空が脱いだり着たりが簡単にできる各種制服を用意してくれていた。キャビンアテンダント、機長、機体整備士などの制服があった。ワクワクしながらこれらの制服を試着して写真に収めた。普段テレビの中でしか見ることのできない制服を身に着けて、誰もが大喜びだった。私も3種類の制服を着てそれらしいポーズをとってみたりして、とても楽しかった。

その後、社員の案内で羽田整備場を見学した。巨大な作業場にはフライトを終えて点検整備中の各種旅客機があった。その中にはボーイング 747型機もあった。こんなに間近でこの有名な航空機を見ることができるなんて、なんてラッキーだろう！記念に機体を背景に何枚も写真を撮った。また、10億円の価値があるという航空機エンジンも見せてもらった。これよりもさらに高価なエンジンもあるという。航空機の機体内部にある部品をじかに目にしたことで、航空機の構造をよりダイレクトに理解することができた。私たちが整備場を見学していた20分あまりの間、外の滑走路ではほぼ1～2分間隔で旅客機が

次々に降り立っていた。これらの旅客機はフライトを終えるとすぐにここに運ばれて整備に入る。やはり羽田空港で離着陸する旅客機は相当に多いのだ。

JALでの次なる見学先は キャビンアテンダントの訓練センターだった。日本の航空会社のキャビンアテンダントは質の高いサービスで有名である。世界に名を馳せる優秀なキャビンアテンダントはどのように養成されているのだろうか……。その現場が見られて嬉しかった。それまでと同様、私たちは2組に分かれて見学することになった。日本語の解る人たちとそうでない人に別れた。後者のグループは王磊さんが引率し、記者の趙さんも同行した。

まずキャビンアテンダントの訓練現場を見学した。案内してくれた女性もキャビンアテンダントだったが、説明によれば、JALのキャビンアテンダントの選考基準は非常に厳しく、大学の現役卒業生を対象に筆記試験と面接を行って選りすぐるという。選ばれた者だけがここで訓練を受けることができるのだ。

私たちが見学に行った時はちょうど訓練の最中だった。案内の女性によると、キャビンアテンダントの訓練生たちはファーストクラス、ビジネスクラス、エコノミークラスの3グループに分けられ、それぞれ異なる内容の訓練を受けるのだという。ちょうど2つの教室で訓練が行われていたが、そのうちひとつはエコノミークラス、もうひとつはファーストクラスの訓練だった。いずれもベテランの キャビンアテンダントが指導教官として訓練に当たっていた。ガラス越しの見学だったが、誰もが熱心にメモを取っていた。普段私たちが大学で講義を受けている時と同じだと思った。

訓練所の廊下には掲示板が設けられ、さまざまな通知が貼り出されていた。主にフライトに関する注意事項だったが、それはキャビンアテンダントが実際のフライトに就く前に、突発事件に対する予備知識を持ってもらうためのものだという。その他にも訓練所にはメイクアップ講座専用の教室も設けられていた。資生堂のメイクアップ・アーチストを呼んでキャビンアテンダントと男性の客室乗務員を対象に講義をするという。ただ単にメイクの仕方を教えるだけでなく、メイクによって親しみやすいイメージを出すためのコツや、スキンケアの基礎知識なども教えるという。キャビンアテンダントは長時間飛行機の中で過ごし、常に時差という問題にさらされている。こうしたストレスを抱えながら常に笑顔を絶やさず、ハツラツとした表情を保つためにはスキンケアが重要になる。ここまで聞けば、JALがメイクの専門家に高い講義料を払ってアテンダントたちにメイクアップやスキンケアを教えている理由が自ずと分かってくる。キャビンアテンダントは航空会社の看板だ。彼女たちの与えるイメージが即ち企業のイメージになるからだ。

続いてカクテルづくりのための実習教室を見学した。カクテル実習教室は海に面した、広々として明るい教室だった。中に入ると、さまざまな洋酒が並べられた大きなテーブルがあった。乗客の多種多様なオーダーに応えるべく、キャビンアテンダントはカクテルづくりも習得しなければならないのだ。テーブルには焼酎や梅酒の他に、たくさんの種類の洋酒がズラリと並んでいた。ここでカクテルのつくり方やお酒のテイスティングの仕方を学ぶのだ。教室には機内で飲み物を収納するのに使うカートも置かれていた。これまで何度も目にしてはいたが、じっくり眺めたことはなかった。小さなカートと侮る

なかれ！なんと約50キロの飲み物を納めることができるという。カートにはいくつもの引き出しがあって、それぞれの引き出しにはアルコール類や飲み物が種類別に納められている。幅50センチ、長さと高さはともに１メートル程のカートにこんなにたくさんの種類の飲み物が納められているとは驚きだった。いつもぼんやりと飛行機に乗っているばかりで、気をつけて観察したことはなかったが、機内にはこんなにもたくさんの「秘密」が隠されていたのだ。

カクテルづくりの教室を後にし、私たちは7階にあるシミュレーション訓練室へ向かった。そこには旅客機のさまざまな部分のシミュレーション設備があった。ファーストクラス、ビジネスクラス、エコノミークラスの各客室に加え、アテンダントが食事を用意するための準備室もあった。ここでは飛行中のさまざまな状況をシミュレーションしながら訓練できるようになっている。ちょうどいくつかのクラスが訓練を行っているところで、実際の訓練の様子を見ることができた。ベテランアテンダントが講義をしているクラスもあれば、アテンダントたちが「実戦演習」中のクラスもあった。シミュレーション設備は全て本物の航空機と同じつくりになっているため、実際のフライトで違和感を覚えるようなことはない。全て訓練の時と同じだ。ここでは教官がアテンダントたちに突発的な状況への対応の仕方やさまざまなお客様への応対方法を教授する。シミュレーション設備の隅に小さなスペースがあったが、そこは救命措置の訓練のためのコーナーだという。飛行中に乗客が心臓疾患やその他の発作を起こすことがあるが、その場合、一般に着陸してから医療施設に運ばれるまでに少なくとも2～3時間はかかる。そこでアテンダントによって救命措置が適切に行われるか否かが病人の生死に関わってくる。そのため、アテンダントたちはここで厳しい訓練を受けて救命措置法をマスターしなければならないのだ。アテンダントの仕事とはなんと骨の折れる仕事だろうか。常に笑顔を浮かべてさまざまなお客に対応しなければならないということ以外に、時に人の生死にまで立ち会い、体調が急変した病人に救命措置を講じなければならないのだ。

シミュレーション設備を見学して10分あまり経ったところで、昼食の時間になった。キャビンアテンダントの日常を体験してもらおうという配慮から、アテンダントたちが普段フライト中にとる昼食が特別に用意された。それはとても簡単な食事で、冷たいランチボックスとコカコーラだけだった。フライト中、アテンダントはいろいろとやることがあってゆっくりランチを食べている時間などない。会社の規定では、10分間で食事を終えて仕事に戻らなければならないことになっている。そのため、ランチボックスの量はそれほど多くはなく、せいぜい女性がやっとおなか一杯になるぐらいの量だった。そのランチボックスを食べながら、たった今訓練を終えたばかりのアテンダントの皆さんをあらためて見た。キャビンアテンダントというのは本当に大変な仕事だと思った。女性なら、誰もが一度は夢見たことのある職業だろうが、キャビンアテンダントの美しい笑顔の影にこんなにも多くの苦労があったとは……。あるいはこれも一生懸命に仕事に取り組むという日本人の美徳の表れか。この精神は本当に尊敬に値する。中国人も学ぶべきだと思った。

訓練センターを見学して、日本のキャビンアテンダントの美しさの背後にある、汗と苦労を知った。あの笑顔の影にこんなにも大変な努力があったとは思いもよらなかった。また、日本人の真摯な仕事への思いを実感することができた。今回の訪日では、往復ともJALを利用した。行きの機内ではJALのキャビンアテンダントは常に笑顔で、サービスも本当にいいな、というぐらいの感想しかなかったが、帰りの機内で、彼女たちの姿を見たときは尊敬の念すらわいてきたのだった。

学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第 5 回訪日の記録とした。以下ではその一部を紹介する。

日付：10 月 19 日 (月)　1 日目
大学名：北京化工大学
氏名：彭立宇

日本での第一日目はほとんど移動でゆられっぱなしだった。飛行機、船、バスと次々に乗り換えたが、誰もが興奮していた。外国に来てその土地の風土や人情に触れられるという機会はめったにあるものではない。大阪の土を踏んで最も強い印象を受けたのは、大阪人の懸命に仕事をする姿だった。日本航空の飛行機では、どのスタッフも乗り込む乗客に対し笑顔で挨拶していた。こうした笑顔で迎えられると、相手の真心がこちらにも伝わってくる。笑顔が自分の職業に対する誠実な気持ちからではなくて、うわべだけのものだったら真心は伝わらないだろう。

空港でちょっとしたハプニングがあった。通関に手間取り船に乗る時間が迫っていた。急いで埠頭に向かったが、突然、陳夢君さんがいないことに気づいた。そこで僕とガイドの呂純明さんが空港に引き返して捜すことになったが、果たして捜しだせるかどうか、自信がなかった。空港はあんなに広いし、不案内だ。こうした状況のなかで人一人を捜し出すのは容易なことではない。しかし、空港に引き返してみると、多分僕たちが人を探しているのがわかったのだろう、慌てた様子の空港スタッフが私たちのところへ来て迷子になっている人がいると告げた。果たして陳さんだった。それからいろいろとあったが、とうとう陳さんと落ち合うことができ、僕たちは埠頭に向かった。陳さんにはぐれてしまったわけを訊いてみると、飛行機に揺られて気分が悪くなったのと日本の気候に慣れないのとで、空港のトイレで時間をくってしまい、トイレから出たときには皆がいなくなっていた。そこで空港のスタッフに助けを求め、代表団を探してもらったところ、僕たちと会うことができたということだった。タクシーで埠頭に向かったが、タクシーの運転手は僕たちが船に間に合うかどうか心配しているのを知ると、道中ずっと大丈夫だと慰めてくれた。結局、船には間に合った。幸い事なきを得たが、これも空港のスタッフとタクシーの運転手のおかげだ。彼たちの仕事に対する情熱と全て相手の身になって考えるという精神のおかげで大事にいたらずにすんだ。あの空港スタッフの慌てた顔と道中ずっと慰めてくれた運転手の顔が脳裏に浮かぶ。今日は日本での一日目だ。まだ始まったばかりだ。これからの数日間、僕はもっといろいろなことを学ぶことになるだろう。

日付：10 月 19 日 (月)　1 日目
大学名：北京化工大学
氏名：陳夢君

訪日一日目を決まりきった「興奮」という言葉で形容したくはないが、今日は確かに普通では経験できないようなことを経験した。

羨ましげなクラスメイトたちに見送られ、しかも初めて飛行機に乗るので興奮していた。確かにクラスメイトが言っていたように、飛行機が離陸するとき耳に不快感があったが、その後は思ったよりも快適だった。JAL の日韓式食事は食器が上等でおいしかった。心のこもったサービスはいつまでも乗って

いたくなるほどだった。

ところが、飛行機がもうすぐ着陸するという段になって乱気流に巻き込まれ、飛行機が揺れ始めた。初めての経験で恐ろしさのあまり、気持ち悪くなってきた。おそらく胃病がまた起こったのだろう。ますます強くなる吐き気の中で日本人のやさしさに触れることができた。

私は先生についてきてもらってトイレの長い列に並んだ。前の女性はすでに長い時間待っているようだった。これでは私の番になったとき、トイレは使用禁止になってしまうのではないか心配になった。真っ青な私の顔を見てキャビンアテンダントが心配して袋を持ってきてくれた。前に並んでいた二人がカタコトの中国語で「お先にどうぞ」と言ってくれた。あまりに気分が悪くてお礼の言葉も言えなかったが、心になんとも言えない温かいものが広がった。このような人に親切にする光景は中国でもよく見るが、異国の人のぬくもりが感じられた。トイレから出ると、見知らぬ乗客が日本語で大丈夫かと訊いてくれたが、私はお辞儀をする以外、どう応えていいものやら分からなかった。

飛行機を降りても胃がむかむかしていた。トランク、バッグ、パスポートなどの証明書をクラスメイトに預け、またトイレに行った。トイレから出てみると、空港ロビーにいるはずのみんながいない。携帯もパスポートもなく、連絡のしようがない。日程もすっかり忘れてしまっている。連絡をとる方法が全くない。私はジェスチャーを交えながら、英語と片言の日本語で空港スタッフに事情を説明した。状況を理解した空港職員が私よりも焦っている様子を見て、また心に温かいものを感じた。そのおかげで絶望的な状況にあっても、私は冷静さを保つことができていた。ほとんどスタッフ総動員という状況になった。フライトナンバーは？――覚えていない。ゲートナンバーは？――覚えていない。目的地は？――よく説明できない。パスポートは？――手元にない。私を助けてくれようとしている人たちの顔が曇った。が、こうした状況に焦りながらも、冷静にどうしたらよいかを考えてくれた。彼女たちの言うことは少しか理解できなかったが、彼女たちの焦りや責任感は伝わってきた。あるスタッフが私の話を聞きながら一緒に方々捜し回り、他のスタッフが団と連絡をとってくれているので心配ないと言ってくれた。パスポートがないので空港から出ることができないと説明され、そのための手続きを手伝ってくれた。同じように慌てて私を探しに来たクラスメイトと先生と再会すると、彼女はホッとしたように笑顔になった。今もあの笑顔をどう表現したらいいか分からないでいる。安心？嬉しい？安堵？どれも違うような気がする。それは多分、自分の責任を果たしたことで出た笑顔だったのではないか。時間がなかったので、大きな声で「どうもありがとうございました」と言うことしかできなかったが、彼女は笑顔で私を見送ってくれた。

今日はとんだ目にあったが、充実した一日だった。体調は悪いが、心は温かい。日本は初めてだが、日本人の礼儀正しさ、仕事に対する責任感、すばらしい仕事の分業体制、私はこの「礼儀の国」が好きになり始めている。旅はまだ始まったばかりだ。明日からまたどんなことが起こるか分からない。疲れたけれども日本にありがとう！

日付：10 月 19 日（月）1 日目

大学名：北京語言大学

氏名：臧楠

朝、興奮して目が早く醒めた。窓を開けて新鮮な空気を吸う。やる気が身体にみなぎってくるのを感じた。今日は待ちに待った日本へ行く日だ。

首都国際空港に着いたのは 11 時だった。何やかにやと手続きがあり 13：15 分に飛行機に搭乗した。

日本航空の客室乗務員が親切に手荷物を棚に載せてくれたり、シートベルトを点検してくれたりした。まもなく飛行機が離陸した。国際線のサービスを受けるのは初めてだったし、生の日本語を聞くのも初めてだった。日本語は普段は学生同士で話すだけなので敬語はあまり使わない。だから敬語が苦手だ。が、今日は乗務員のサービスで身近に敬語を聞き、いろいろと敬語の使い方を学ぶことができた。

アッという間に大阪関西国際空港に到着した。通関手続きをしているときに感じたことは、空港のどの部門も仕事をてきぱきとこなし、規律正しく、仕事の効率が高いということだった。ほんの十数分間で手続きは終了した。続いて船に乗るためにバスで神戸港の埠頭に向かった。バスから神戸港に下りた立った瞬間、本当に日本に着いたことを実感した。潮風に顔をなでられ、いい気持ちだった。一日の旅の疲れが吹っ飛んだ。日本六番目の大都市の息吹を感じた。

日本での最初の食事はビュッフェだった。食事の後、レストランの外に出て美しい景観を堪能した。呂先生の話によれば、ここは神戸で最も美しい場所だということだったが、それは本当だった。岸辺に立って見た神戸の夜景は本当にきれいだった。輝くネオンに大観覧車、どれもすばらしかった。

宿泊はクラウンプラザ神戸が用意されていた。ホテルに向かう途中、たくさんの駐車場が立体駐車場になっているのに気づいた。呂先生から前に日本には場所を節約するために立体駐車場があると教わったが、今回実際にそれを見て、日本人の創造力に感心した。

ホテルに着いた。訪問団のためにこんなに快適な部屋を手配してくれてとてもありがたかった。初めてウオシュレットのついたトイレを体験したが、日本人の生活の質の高さに驚いた。

今日は移動だけの日程だけだったが、人生初という体験をいろいろした。日本人の仕事に対する情熱、真剣な態度、慎重さが印象的だった。旅はまだ始まったばかりだ。明日はどんな収穫があるのだろうか。明日もきっと人生の宝になるような収穫があるだろう。

日付：10 月 20 日 (火)　2 日目
大学名：北京化工大学
氏名：趙立薇

今日は中華街、人と防災未来センター、それと有名なワコールの 3 ヵ所を見学した。スケジュールが詰まっていたので、お昼は車中でお弁当を食べた。疲れたが、誰もが元気一杯、写真を撮ったり、おしゃべりをするのに忙しかった。夜の中日大学生親睦会は食事をする時間ももったいないほど楽しかった。忙しい一日が 8：30 に終了した。今日は 3 つの重要な活動について記録する。

(1) 人と防災未来センターでは、ボランティアの人に連れられて地震の全過程を見学した。それは音と光学技術を駆使した真に迫るものだった。全過程を見終わって、人がちっぽけな存在でしかないことと自然の威力を思い知らされた。大型重機を使って数年或いは数十年かかって建設した高架、鉄道、家屋が一瞬のうちに崩れ落ちた。たった数秒の間に……。人に考える時間も与えないままに……。悪魔のような地震が子供にも襲いかかった。振動音、目の前に迫る画面、私の手を握る友だちの手がだんだんきつくなっていった。本当に怖がっているのだ。被災現場の人々がどんなに恐ろしい思いをしていたか、想像すらできないけれども、被災後の映像を見る限り、人々は泣いてはいたが、絶望してはいなかった。被災者は家をなくしたが、孤軍奮闘しているというわけではなかった。死者の数はどんどん増えていったが、生きている子どもたちに勇気づけられた。多くのボランティアを見て心が温かくなった。人を思う気持ちに国境がないことを悟った。

久保さんの説明で、例えば地震の前兆やいかに地震に備えるかなど、地震について多くを学ぶことが

できた。彼が四川の被災民の支援に駆けつけたことを聞いて感動した。久保さんは最後に魯迅の「度尽劫波兄弟在　相逢一笑泯恩仇(劫波を度(わた)り尽くして兄弟在り　相逢(あ)いて一笑すれば恩仇泯(ほろ)ばん」(訳注：人間、あるいは民族同士の誤解、憎しみを解いてくれるのも時間である)という詩を引用して解説を終えた。私は善良な中国国民が広い心で世界を包みこみ、世界中の人々もそうあってほしいと心から願った。なぜなら愛に国境はないのだから。

(2) ワコールで最も印象的だったのは「人にやさしい」ということとその規律正しさだった。ワコールは女性一人ひとりをより美しく、より健康的にすることを目指し、しかもそれを実践している。4歳から74歳まで、それぞれの年齢に合った服のデザインだけでなく、人種・地域・体型的特徴の違いに基づいた下着のデザインを行っている。また、さまざまなシーンのデザインも女性への細かな配慮が感じられた。何千人もの従業員がいるが、閑そうにしている人などなく、誰もが懸命に静かに仕事をしていた。「人にやさしい」、規律正しいワコールの企業文化が印象的だった。

(3) 中日大学生交流会では中国語、日本語、英語が飛び交った。スムーズなコミュニケーションというわけにはいかなかったが、手持ちぶさたな感じの人や恥ずかしがったりしている人は一人もいなかった。英語や表情、ジェスチャーで自分の言いたいことを伝え、民族文化、国の現状、自分の夢や現在努力していることなどを話し合った。部屋中笑い声とさまざまな言語が飛び交い、めちゃくちゃのような感じもしたが、終始とても和やかな雰囲気だった。日本の大学生の親切なもてなしが心に残った。

もう12：00だ。一日が終わった。まだ興奮している。明日も楽しみだ。

日付：10月20日（火）2日目
大学名：中国石油大学
氏名：何艶娜

今日一日を一言で言うと、苦しさと楽しさが半々だった。昨晩の興奮がまだ続いている。寝不足の症状がまだ残っている。日本の何もかもが新鮮に映る。

今日のスケジュールは内容豊富で、いろいろと考えさせられた。変形した堤防、静かに語られる災害の経験……。今の神戸はすっかり落ち着きをとりもどしていた。そう、この賑やかな通りやモダンな建物の奥に歴史の重みが隠されているのだ。

先ず人と防災未来センターへ行った。優しそうな一人の老人が流暢な中国語で話をしてくれた。彼は日本生まれの日本育ちだ。一見、平凡に見えるが、彼はとても幸運な人だ。1995年の阪神淡路大震災の生存者だ。私にとって地震という言葉は遠い存在で、あまりなじみがない。そういう私も運が良いといえる。子どもの頃から今まで地震を経験したことがない。地震についてはいろいろと教わっているが、これまで全く気にかけてこなかった。地震が起こったら、急いで逃げ、安全な場所に避難すればよいと思っていた。地震シミュレーションホールに入るまではそう思っていた。地震は分単位で起こるものでも、ましてや時間単位で起こるものでもなおさらない。ほんの数秒のうちにすべてが倒壊してしまうのだ。火災、爆発、倒壊、人々はなすすべもなく立ちつくす。生存者は運が良いとも言えるが、さまざまな心理的プレッシャーに直面することになる。これらの障害をどのように克服していけばいいのか。強さ、サポート、理解……、重要なことは教訓に学ぶことだ。耐震性と減震性の高い世界で最も堅牢な建物の構造を考え出した神戸の人々は偉大だ。

午後はワコールに行った。その後、京都の大学生との交流会があった。ワコールは世界的に有名な女性下着メーカーだ。ワコールの人間科学研究所を見学した後、博物館も見学させてもらった。下着の美

しさもさることながら、デザイナーが細部まで注意を払ってデザインしている点が驚きだった。デザイン上のことだけでなく、素材の選び方や内部構造の細部にいたるまでよく考えられていた。ちょっとしたことで下着がより快適なものになる。

一番楽しかったのは日本の大学生と過ごした時間だった。楽しい踊りにふろしき。エコで可愛らしかった。その後の交流も楽しいものだった。お互いにあまり理解できない言葉を操り、唯一英語だけが頼りだった。大変だったが、楽しい交流だった。ある日本の学生が私に自分の下駄を履かせ、着物を着させてくれた。初めての着物、超うれしかった！その後、中国に留学したことのある日本の学生が通訳をかってでてくれたので、コミュニケーションの障害がなくなった。ただ彼は通訳に忙しくてあまり食事ができなかったのではないだろうか……。要するに、今日はとても楽しい一日だった。

今日はスケジュールがつまっていたせいか、もう少しで朝南京街へ行ったことを忘れるところだった。結婚紹介所の看板があった。私たちはその看板を背景に写真を何枚も撮った。良い結婚ができますようにという願いを込めて。

明日はもっとすばらしいことがあるだろう、楽しみだ。

日付：10 月 20 日（火）2 日目
大学名：首都師範大学
氏名：王邸玥

今日はとても充実した一日だった。特に人と防災未来センターが印象に残った。日本に来てまだ一日しかたっていないが、日本の若い女性はドラマやファッション雑誌で見たとおり、普通に仕事をしたりアルバイトをしたりして全く心配の無い生活を送り、ファッションやブランド品が好きという印象を受けた。日本は先進国で、収入も平均化され、グレードの高い生活を追求している。神戸の町でおしゃれをしたファッショナブルな女性を見たとき、こうした日本人女性のイメージがより確かなものとなり、神戸の女性もそういうものだと思っていた。

しかし、阪神淡路大震災のビデオを見終わった後、神戸の町を歩いていた日本人女性に対する見方が 180 度変わっていた。自分の浅薄な認識が恥ずかしくなった。日本人女性の表面的な現象しか見ていなかったのだ。彼女たちは他人には理解できない苦痛の記憶を抱えながら、力強く活きている……。夜更けや寒い日には今も消えない地震の恐ろしさに窒息しそうになりながらも……。神戸の人たちが何か悪いことをしたというのだろうか。運命とはなんと不公平なものなのか。

彼たちは普通の人よりも生命を大事にしているに違いない。なぜなら、彼らは生命のもろさを知っているからだ。人類は「自分にできないことなどない、自分こそが地球の主だ」と考えてきた。私も人類の偉大さは認めるけれど、こうした驕りによって自然に従うという永遠の原理が忘れられてしまっているようにも思う。

2 本目のビデオを見終わっとき、涙があふれてきた。小さなことで悩んでいた自分に腹が立った。もっと意味のある何かを高い志で追求していかなければと思った。

今日一番嬉しかったのは、夜の立命館の学生との交流で美里さんという女子学生と知り合ったことだ。彼女は中国語学部の一年生だ。来年、上海交通大学に 1 年留学するつもりだと聞かされた。彼女はニュージーランドにも 4 年間留学した経験がある。彼女は中国語と英語ができさえすれば、どこの国へ行っても自立して生活できると言う。

私は 1 年後彼女と上海か北京で会っている情景を想像してみた。メールアドレスを交換し合った。きっ

とまた会えるだろう。次は中国で。In my country!

日時：10 月 21 日 (水)　3 日目
大学名：北京語言大学
氏名：臧楠

今日は忙しい一日だった。

朝、バスに乗って二条城に向かい、京都の大学生と一緒に京都の文化を訪ねる旅が始まった。二条城は有名な世界文化遺産で、徳川将軍家の京都での住まいだった所だ。二条城に入ると武家の文化が感じられた。鶯ばりの廊下を歩くと本当に鶯の鳴き声がした。これで外敵の侵入を防いでいたのだが、日本人の頭のよさに感心した。二条城の中を一周してみて、日本の城と中国の宮殿にはだいぶ違いがあることに気づいた。日本の城は精緻という印象を受けた。庭園は狭いが、築山も水も木もあり、自然の中に身を置き、自然と一体になっているような気持ちになった。一方、中国の宮殿は壮大で、威圧感がある。二条城を見学した後、京都の学生たちと一緒にもう一つの世界文化遺産である清水寺に向かった。

清水寺は寺の中に湧く清水にあやかりこの名がつけられたという。清水は 3 つあった。それぞれ長寿・富・智恵の象徴で、特別な力があると信じられている。今日、私は長寿と智恵の清水を飲むことができた。最も印象深かったのは「清水の舞台」だ。これは 139 本もの柱で支えられているが、一本の釘も使われていないということだった。高い山の上に舞台があるので、日本では思い切って何かをするときに「清水の舞台」から飛び降りるというそうだ。清水寺では日本の古い文化だけでなく、規律正しく見学している小学生の姿を見て日本国民の素養の高さが見て取れた。清水寺の見学が終わると、名残惜しかったが、京都の大学生と別れた。この 2 日間で深い友情が芽生えていた。中日両国の青年はこれからも多くの交流の機会を持ち、互いに学びあい、中日友好の絆となることを信じている。

午後は待ちに待った新幹線に乗った。中国は交通分野でも世界の先進技術に追いつこうとしているが、新幹線は 1964 年に運行を開始しているので、中国よりも約 40 年早いことになる。日本の公共の場所にはよく環境保護のためのキャンペーンポスターが貼ってあることが印象的だった。ポスターで一番よく見られるのが「環境にやさしい」という言葉だ。日本国民が環境保護に真摯に取り組んでいるのが分かった。

今日は三菱電機稲沢製作所の見学もあったが、科学技術の先進性は一つの国にとって重要な意味があることを実感した。まさに鄧小平が言うように「科学技術は第一の生産力」だ。スパイラルエスカレータや高速展望用エレベータに乗ったりエレベータの製造過程を見学したりと、普段触れることのできない知識を学ぶことができた。

忙しかった一日が終わった。たくさんのことを学んでホテルに戻った。明日の箱根の温泉が楽しみだ。

日付：10 月 21 日（水）3 日目
大学名：北京語言大学
氏名：徐菲

3 日目、キーワードは時間厳守と人にやさしい設計。

今日も京都の大学生たちとの交流活動が続けられた。朝早くに京都の名所旧跡、つまり世界文化遺産である二条城と清水寺の見学に出かけた。靴下を履いたまま二条城の広々とした「鶯ばり」の廊下を歩いた。昔の腕のいい職人たちの匠の技に感嘆しながらも、寒々とした感じを受けた。こんなに広い場所

に住んでいた徳川家康はきっとひどく寂しかったにちがいないと思った。急ぎ足で主な部屋を一回りするだけで 30 分ほどかかる、注意しなければ迷子になりそうなところで生活していた昔の人はさぞかし苦労の多かったことだろう。

清水寺の名はずっと前から知っていたが、今日ついにその姿を見ることができた。大学 1 年のときに、清水の舞台から飛び降りるという典故を聞いたことがあった。先生や先輩たちから実際の清水の舞台はそれほど高くなく、飛び降りても死亡率は 10%にもならないと聞かされていたが、実際の舞台はやはり想像よりも高かった。紅葉が始まっていた。数週間後の 11 月も末になると、目の覚めるような紅色に染まるということだが、残念ながらこの目でその美しい景色を見ることはできなかった。

立命館大学の奥村さんは、清水寺から下る参道の両側に並ぶ商店でお土産を買う私にずっと付き添ってくれた。もうすぐ集合時間だと注意され、走って駐車場に向かった。日本人の時間厳守という習慣についてはここで是非触れておかなければならない。見学でも企業訪問でも、すべて一分一秒違わず時間どおりに手配されていた。正午に新幹線に乗るために駅に向かう道中や午後の三菱電機稲沢製作所の見学のときもそうだった。中でも見学の案内をしてくれる担当者が、受付にドアカードを受け取りに行くときに、よく耳にする「少々お待ち下さい」という言葉の替わりに「一分間お待ちください」と言っているのを聞いて、日本社会の時間観念の強さを実感させられた。

三菱のエレベータと聞いて中国人がまず思い浮かべるのは、おそらく上海三菱エレベータのキャッチコピー「上上下下的享受」だろうが、今回の三菱電機稲沢製作所の見学では、人にやさしい設計を非常に重視しているという点が印象に残った。宣伝パンフレットには「エレベータの運転速度は 750 m / 分、その速度で運転されるエレベータの中に立てた十円玉が倒れない」と書いてあったが、まったくすばらしいと思った。エレベータ試験塔で乗ったエレベータは 3 階から 39 階まで上がるのに 1 分もかからなかった。しかも揺れもめまいも全く感じなかった。これにも驚いた。

人にやさしい設計という点でもう一つ私の注意を引いたものがあった。この 2 日間走った高速道路も今日のお昼に乗った新幹線でもそうだったが、道路の両脇に防音板が取り付けられ、区間によっては防音板の防音効果を上げるために、内側に曲げ弧を描いたようなデザインになっていた。しかも、周辺の緑化もよくなされていた。この点は中国も日本に見習うべきだと思った。

日付：10 月 21 日（水）3 日目
大学名：中国石油大学
氏名：周鵬

来日 3 日目、時間の経つのがほんとうに速い。昨日は京都の大学生たちとの楽しい交流があったが、今日も楽しい一日になるだろうという期待が膨らんだ。京都は日本有数の古都であり、いたる所に歴史の面影が偲ばれる。二条城に着いたときには、京都の大学生たちはすでに到着していて僕たちを待ってくれていた。彼たちの案内で二条城を見学し、二条城の歴史や城主について知った。もちろん、見学の間、日本の学生たちと自分たちの夢についても語り合った。二条城の見学を終え、バスで有名な清水寺に向かった。清水寺に到着すると、まるで中国の観光地に来たような錯覚に襲われた。清水寺は大勢の人でごった返していた。その中には学生の姿が多く見られた。ウイークディだったので、なぜ日本の学生は授業のある日に旅行できるのだろうかと思ったが、後になって、日本には修学旅行というものがあることを知った。この点、日本の学生は中国の学生よりも幸せだと思った。清水寺の見学では、バスの中で知り合った京都の女子学生がずっと案内してくれた。日本の女子学生の話す声はとても素敵だった。彼女の

案内で清水寺を見学した。日本文化の真髄に触れたような気がした。その後、バスに乗って京都駅に行き本場のお寿司を食べた。それから新幹線に乗って名古屋に向かった。新幹線の乗り心地を体験することができた。名古屋に到着後、三菱電機の稲沢製作所を見学した。三菱電機の緻密な仕事とイノベーション精神が心に残った。夜、バスで浜松に向かい、忙しい一日が終わった。

日付：10 月 22 日（木）4 日目
大学名：中国石油大学
氏名：安天琳

今日は日本に来てから一番リラックスできた、忘れられない一日となった。

箱根の温泉は 3 日間の旅の疲れをすっかり吹き飛ばし、今日一日の農林業の見学でついたほこりをすべて洗い流してくれた。と同時に、箱根の温泉は私たち一行 34 人の心を一つにしてくれた。それぞれ大学が違うことであった疎外感も互いにお酒を酌み交わすうちにすっかりなくなった。先生や訪日団幹部と学生たちとの距離もだいぶ近づき、和気藹々とした時間が流れた。

34 枚の座布団が整然と並べられた宴会場の大広間に同じ浴衣に身を包んだ 34 名の姿があった。温泉に浸かって全身の疲れと汗を洗い流したばかりで、みんな頬を紅潮させていた。9 名の男子学生はあたかも希少動物でもあるかのように、先生の命令で強制的に 19 名の女子学生の間に座らせられたので、もともとお風呂で赤くなっていた頬がいっそう赤くなった。まるで 32 個の熟した真っ赤な富士リンゴのように……。王団長から原理原則にのっとった政治意識の高い、多少長めだったが、生き生きとした挨拶があり、渡辺先生からは心のこもった祝福があった。本格的な日本式宴会が温かい雰囲気の中で始まった。それからすぐに、宴会を盛り上げるのが上手なガイドの呂さんが全ての学生を次から次へと舞台に上げた。彼に「促され」、ある者は下手ながらも日本の歌を唄い、ある者は子供のころに流行ったがとっくの昔に時代遅れになっているダンスを披露した。僕たち石油大学の男子学生も「この難から逃れる」ことができず、男子学生 4 人で舞台に上がり「吠えた」が、まったく音程がはずれ、間抜けさを露呈してしまった。班長の周さんは「One Night in Beijing」の歌詞を完璧に忘れ，温浩の「愛の初体験」も暴走して失敗。張振欣君の誕生日の告白と完全に予想を裏切る「祖国に石油を捧げる」のすばらしい歌声によって、ついに石油大学の男子学生のメンツを 3 点挽回することができた（笑）。宴会もここまで来ると、メンツだとか、イメージだとか役職がどうのこうのはまったくどうでもよくなり、ただ騒いで痛快だった。酌をしたりされたり、宴もたけなわ。真剣なまなざしと会心の笑い声、高揚した気分、紅く染まった頬、みんな縁あって箱根の山中で酒を飲みながら歌い人生を語り合う……。わさびの辛さも爽快で、清酒の喉ごしも良かった。誰もが小声で歌を口ずさみ、ダンスに合わせてリズムをとった。訪日団全員が今夜一つの家族になった。

PS：王磊先生の「殺人」（今中国で流行っている殺人ゲーム）は本当に超強かった……。

日付：10 月 22 日（木）4 日目
大学名：中国石油大学
氏名：温浩

10 月 22 日、バスに乗って磐田市に行き静岡県農林技術研究所を見学した。企画経営部の柴田茂樹さんから概要説明を受け、研究所の展示ホールやハウス栽培を見学した。

柴田さんの説明でいろいろなことを学んだ。研究所で行われている植物の新品種は主に遺伝子組換え、倍数性育種、F1 育種、突然変異育種、種族間交雑育種などの方法がとられているという。また、ハウス

栽培のメロンや他の植物の栽培過程やハウスを見学した。農林学校の学生や先生とも交流の機会を持つことができた。

昼食は磐田市の和食レストランで食べたが、とても美味しかった。午後は JA 遠州の中央園芸流通センターを見学するためにバスで 40 分ほどの距離を移動した。

園芸流通センターでは、農作物の流通方法やここで研究している独特の植物に関する説明があった。例えば海老イモは高級食材で、500g 数千円の高値がつくそうである。また、LED 培養箱やこの培養箱を使ってどのように植物の葉と花を同時に育てるかについても説明を受けた。こうして開発されて付加価値のついた花が市場で売られていた。非常に値段が高い。

2 時 30 分頃、バスで箱根の温泉旅館に向かった。2 時間ほどの道のりだったが、山道を走り、ついに箱根に到着した。

少し休憩をとった後、私たちは待ちに待った温泉に入った。初めての日本の温泉ということで気持ちが高ぶっていた。その後、懇親会が開かれ、訪日団の先生や学生が一緒になって料理を食べ、お酒を飲み、歌を唄った。そして、黄征君と張振欣君の二人が異国で迎えた誕生日をみんなで祝った。懇親会はとても楽しい雰囲気のなかで終わった。

誰もが愉快な時を過ごした後、僕たちはもう一度温泉に入った。温泉に入りながらみんな言いたいことを言いあった。そして、部屋に戻ると、王先生と学生 4 人で約 2 時間、「殺人」ゲームを楽しんだ。今日の日程はこうして終了した。みんなすぐに深い眠りについた。みんないい夢を見ているだろうか。明日もまた新しい一日が始まる。

日付：10 月 22 日（木）4 日目
大学名：首都師範大学
氏名：郭潔威

早朝、バスで磐田市に向かい静岡県農林技術研究所を見学した。ここでは主に農作物の栽培技術に関する研究が行われていた。この研究所の売りは「施設園芸」で、研究所内には大小各種のハウス温室があった。データの採集や生産への応用といった栽培に関する研究が行われているという。さまざまな新品種の研究開発によって、作物の生産量や品質が大幅に向上し、多くのハイテク農作物が生産されていた。また、新技術の研究開発を重点的に行うと同時に、特に環境保護にも力を入れ、環境や生態系を破壊しないように注意している。ここ数日、日本の大型工場を見学したが、全体としてとても印象的だったのは、日本が産業効率と同時に環境保護にも十分配慮しているという点だった。すべての研究開発は環境を破壊しないという前提で、環境と自然との持続可能な歩調のとれた発展を目指して進められていた。この点は目下経済の高度成長期にある中国社会も学ぶべきだと思った。

研究所の展示ホールには最先端の研究成果が展示され、新技術の原理についても理解を深めることができた。その後、外に出て温室栽培されているメロンや野菜など、一連の農作物のハウスを見学した。どの苗も研究者によって丁寧に世話されていた。温度湿度はもとより、光線についても入念にコントロールされ、厳密にチェックされていた。このように厳しく管理しているからこそ、多くの作物の開発と普及ができるのだ。その後、地元の農林学校の学生が農場で授業を行っている様子を見学し、彼たちが作ったみかんをご馳走になった。

午後は JA 園芸流通センターを見学した。ここは日本でも唯一の大型園芸流通センターである。また、日本でも唯一というハイテク機械が何台も導入されている大規模な流通センターだった。ここでは農家と連携しながら農作物を集荷し、日本全国に出荷するだけでなく、農業技術に関する研究も一部行われ

ていた。関係者の丁寧な説明により、私たちは物流の状況や日本農業の現状について理解することができた。

夜、箱根に到着し、初めて温泉に入った。とても気持ちがよかった。特に露天風呂に入っていると、自然と一体になったような感じがした。露天風呂は山の冷たい外気に包まれていたが、浴槽のお湯はあつあつで、湯気が立ち上っていた。温泉から出た後は身体の芯から温まり、とても気持ちがよかった。夜は浴衣を着ての宴会で、会席料理を食べた。訪日団にとって初めてのとてもリラックスした宴会となった。学生の多くが歌を唄い、さまざまな芸を披露した。多芸多才の人が多く、大いに盛り上がった。梅酒や清酒を飲み、日本を存分に体験することができた。今日はきっと思い出に残る一日になることだろう。

日付：10 月 23 日（金）5 日目
大学名：中国石油大学
氏名：張振欣

訪日 5 日目。ついに東京にやってきた。

今日一日は主に三菱グループの見学だ。まずはじめは三菱化学である。日本の老舗的化学メーカーである三菱化学は、日本の化学応用分野の成長と発展を見守ってきた証人だ。また、三菱化学は世界でも数少ない白色 LED 技術を擁するハイテク企業であり、さまざまな分野で重要な地位を占めている。三菱化学が生産するピッチ系炭素繊維は幅広い分野で応用されているが、それはピッチ系炭素繊維が同じ重量という条件でより大きな強度があること、据付に便利なこととその信頼性によるところが大きい。三菱化学の表面活性剤も日用品や化粧品などに使われ、日本中にその名を知られている。また、白色 LED は十分な光度があり、経済的かつ省エネである。三菱化学はさまざまな分野の製品を網羅し、強大な研究開発能力を持ち、製品の実用的価値や社会的価値も高く、応用性にも優れ、大きな市場と将来性が期待される。

三菱化学の後は東京海上日動保険を見学した。東京海上日動火災は歴史が最も古く、さまざまな顧客層を持った保険会社である。東京海上日動は「すべては顧客のために」という原則に基づき多方面にわたる保険業務を行っている。業務の拡大とともに東京海上日動は国際的大手保険会社として発展していった。世界の大手保険会社の中でも東京海上日動は、かなり早い時期から中国に進出している会社の一つであり、中国の外国保険会社の中でも保険料収入で長い間第一位を占めている。改革開放が進むにつれて、中国ではますます多くの大型プロジェクトが保険に入るものと思われるが、東京海上日動の対中事業にとってそれはまたとない機会となるだろう。

次の訪問先は三菱商事だった。「商事」とは一体何を意味するのか、説明を聞くまではよく分からなかったが、説明を聞いて、「商事」の機能についてよく理解することができた。三菱商事の創設から現在まですでに約 100 年が経過している。三菱商事の歴史は、ある財閥が「小」から「大」へと規模を拡大し、単一的なものから複雑なものへと進化を遂げた歴史でもある。現在の三菱商事は単なる商品取引を行うだけでなく、商品流通に関する研究開発や生産分野にまで参入し、独自の産業チェーンを形成している。あくまで貿易を中核とするという前提条件で、自社の産業チェーンを形成し、システム的供給を図っている。また、コスト削減をしながら会社の抵抗力と競争力を強化し、それらを今後の発展に必要な原動力と資源的保障としている。

日付：10 月 23 日（金）5 日目
大学名：北京語言大学
氏名：張偉鑫

朝 8 時半ごろ箱根を出発し、新幹線「こだま号」に乗って東京の品川駅に到着した。その後、バスで三菱化学に向かった。今日の主な見学先は三菱化学、東京海上日動火災と三菱商事である。今日は東京の第 1 日目だったが、三菱の力に圧倒された 1 日でもあった。

まず、三菱化学は 1934 年に設立され、石炭をベースに発展してきた会社であるが、創業以来 70 年近くを経た今、三菱化学は総合化学原料メーカーへと発展し、太陽電池、ポリ袋、メガネレンズなど、およそ化学技術に関わるすべての産業に貢献している。そしてその技術レベルは国内ナンバーワンである。

東京海上日動火災は保険会社で、創業者は渋沢栄一氏である。今は三菱と合併し、三菱グループの一員となっている。会社の概要説明の中で最も興味を惹かれたのは CSR プロジェクトである。CSR は一般に「企業の社会的責任」と訳されるが、中国ではまだ余り知られていない。東京海上日動は CSR として希望小学校の建設、大学奨学金、植樹等のすばらしい活動を展開している。この点は中国の企業も参考にすべきだと思った。

三菱商事の第一印象は高級感と巨大さだった。三菱商事は日本最大の総合商社であり、日本独特の企業形態によって国内と海外約 80 カ国に 200 余の支店を持つ。事業は貿易や投資など多方面にわたり、その業務は全面的かつ多元的だ。三菱商事の扱う製品はラーメンからミサイルまでと言われるようにすべてを網羅し、営業額は日本の財政予算の 4 分の 1 に相当するという。その金額と業務範囲の広さ、潤沢な資金に驚いた。

今日は午前中からずっと「三菱はなぜこんなに発展したのか」ということを考え続けていたが、これは三菱商事 3 綱領と関係があるように思う。3 綱領とは即ち「所期奉公」、「処事光明」、「立業貿易」である。それぞれの具体的な意味は次のとおりである。所期奉公：事業を通じ、物心共に豊かな社会の実現に努力すると同時に、かけがえのない地球環境の維持にも貢献する。処事光明：公明正大で品格ある行動を旨とし、活動の公開性、透明性を堅持する。立業貿易：全世界的、宇宙的視野に立脚した事業展開を図る。

「3 綱領」は三菱 4 代目当主岩崎小彌太の訓諭をベースに、1934 年に制定された旧三菱財閥の行動指針だったが、三菱財閥解体後は三菱商事の企業理念を表す 3 綱領として、その精神は経営陣や社員の一人ひとりの心の中に息づいている。

日付：10 月 23 日（金）5 日目
大学名：首都師範大学
氏名：趙雲

今日は箱根から新幹線で東京に来た。訪日 5 日目が東京でスタートした。東京に着いてすぐに生活のテンポが速くなったように感じた。新幹線の駅構内では忙しそうに歩くサラリーマンを多く見かけた。数日前に行った京都や神戸と比べ、東京の人口密度は明らかに高いようだ。しかも、数日前と違うのは、東京は高層ビルが林立し、京都のような静けさ穏やかさはないが、生命力と活力に溢れる街だという点だ。

午前中は三菱化学の本社を見学し、昼食も三菱化学で食べた。文化系専攻の私にとっては、今日の見学内容はなじみの薄いことばかりだったが、それが却って新鮮に感じられ、知識も増えた。三菱化学の製品は多岐にわたり、生活の中でよく見かける品物のすべてが生産されていた。中でも現在開発中のコンセプトカーの技術はかなりレベルの高いものだった。三菱化学の関係者と中国人社員と一緒に昼食を

とった。私の隣に座ったのは明日のホームステイでお世話になる戸川さんだった。60 歳を超えた戸川さんは想像していたよりも溌剌としていて、明日の予定を詳しく教えてくれた。

三菱化学を後にして、午後は東京海上日動火災と三菱商事本社を訪問した。そして、夜は会社の関係者や中国人社員と一緒に会食した。中国人社員との交流の中で留学や日本企業への就職に関する情報をいろいろと得ることができた。これは就職活動をすでに始めている大学 4 年生の私にとってずいぶん助かった。

夜の東京もとてもきれいだった。ホテルの部屋に入ってまずしたことは、窓際に立って東京の夜景を眺めることだった。東京タワーが遠くにくっきり見えた。東京は日本の首都としてその名に恥じない美しい都市だと思った。

明日から 2 日間のホームステイだ。すでに戸川さんに会っているが、やはり緊張する。日本語はできるが、今回のように日本の家庭にお邪魔するような機会はこれまでほとんどなかった。明日はきっととても充実した一日になるだろう。日本の文化を理解するだけでなく、日本人にも是非中国文化や中国の大学生と青少年の中日友好に対する決意や思いを理解してもらいたいと思う。

日付：10 月 24 日（土）6 日目
大学名：北京化工大学
氏名：高遠

ホームステイ？　ホームステイ！

日本に来る前、日本に行ったら是非日本人と寝起きを共にして、本当の日本文化を体験したいと思っていたが、時間が経つにつれ、他の団員と同じように、この気持ちに少しずつ変化が現れた。期待がすっかり緊張に変わってしまったのだ。ホームステイの 2 日間、日本人のことがうまく理解できないのではないか、失礼なことをしてしまうのではないか、日本人と何も話せないのではないかと、心配はつのるばかりだった。

その日がついにやってきた。呂さんの案内で日中経済協会に行った。決められた席で待っていると、どんどん緊張してきた。ホストファミリーが到着し、団員の学生を次々と連れて帰るのを見て、今度は焦りの気持が出てきた。早く迎えに来てほしいという焦りの気持ちだ。今日と明日の 2 日間の楽しい生活に早く入りたいと思った。渡辺さんに「高遠」と呼ばれたときは、嬉しくて飛び上がりたい気持ちだった。何がなんだか分からないままに、気付いたときにはホストファミリーの家に向かう途中だった。私を迎えに来てくれたのは三井物産の石井頼尚さんだった。「そう呼ばれるとなんだか他人行儀だね」と、彼は流暢な中国語で言った。そして奥さんの中国語は自分よりうまいと言った。急にあれこれ心配していた自分が可笑しく思えてきた。石井さんは今年 28 歳で、いわゆる「80 後」世代だ。歩きながら話していると、しょっちゅう中国と日本の間を行ったり来たりしている間に奥さんの夏子さんと中国で知り合い、結婚することになったそうだ。夏子さんは天津で 8 年間暮らしていた。石井家ではまるで自分の家にいるようにのびのびできた。

石井さん夫婦がとても親切だったことは言うまでもないが、二人は中国に対し深い思いを抱いていた。夫妻が中国で知り合い結婚をしたということ以外にも、中国文化がとても好きで、家にはたくさんの中国の工芸品が飾ってあった。石井さんは中国で 3 つの省以外は全部行ったことがあると言っていたが、これも石井さんの中国への思い入れが強い理由になっている。

夏子さんは今年の 5 月 16 日に「沙月」ちゃんを出産した。産まれて 5 ヶ月になる可愛い沙月ちゃん

も私にまる一日付き合ってくれた。本来はたっぷり食べてぐっすり眠らなければいけない BABY なのに、今日はまるまる一日、一緒に「東京」見物をしてくれた。石井さん一家が本当に親切に温かく接してくれたので、少しも堅苦しい感じがなかった。

今日は天が味方してくれなかった。午後から小雨が降り始めた。私たちは大観覧車に乗った後に帰宅し、一緒に晩ご飯の準備をした。鶏肉ダシの「鍋」だった。今日一日とても ENJOY した。明日への期待が広がる。明日のスケジュールも実は午前中に石井さんと一緒に決めたのだが……。それにしても今日は楽しかった。

日時：10 月 24 日（土） 6 日目
大学名：北京化工大学
氏名：羅龍哲

今日はホームステイの 1 日目。朝 9 時半に日中経済協会に到着し、ホストファミリーの迎えを待った。10 分後、私のホストファミリーである塚越さん一家が 4 人全員でやって来た。家族総出で迎えに来てくれるとは思ってもみなかった。

午前中は塚越さんの母校である東京大学を見学した後、学食で昼飯を食べた。午後は私の行きたいところへ案内してくれるということで、原宿に行った。そして家へ帰り、プレゼントを交換し合った。塚越さん一家はとても興味深いプレゼントをいろいろと用意してくれていた。私が持ってきた中国のジャスミン茶、ビスケット、お菓子もとても喜んでくれた。

夕食は日本式のお鍋だった。夕食後はみんなでトランプをした。新しい遊び方を覚えた。

塚越さん一家はこのホームステイのために、僕の故郷の長春のことをインターネットでわざわざ調べてくれていた。また、僕が日本語を勉強している学生であることも知っていた。僕が中国で書いた「私の日本の印象」という作文も読んでいて、日本語の『敬語指南』という本を買っておいてくれていた。この作文に日本語の敬語はとても難しいと書いていたからだ。

塚越さん一家は本当に細かい気配りをしてくれた。僕だったらとてもここまではできないだろう。

日時：10 月 24 日（土） 訪日 6 日目
大学名：北京語言大学
氏名：蔡瑋

今日の日記のテーマは「ホームステイ」。

朝、日中経済協会へ向う途中、他の団員たちと冗談で、誰が最後まで残るか賭けようと言っていたが、結局、私がすべての団員がホストファミリーに迎えに来てもらったのを見届けるという、なんとも光栄な瞬間に立ち会うことになった。

でも、ホストファミリーの迎えが最後だったために、郭沫若先生の直筆を目にすることができた。

10 時ごろ、待ちに待った松木さんがようやく迎えに来てくれた。思いがけず、可愛い 2 人の子ども、のりちゃん（3 歳）とさとちゃん（4 歳）を連れていた。この 2 人は本当に可愛らしかった。誰もがその小さな手をとり、まんまるとしたほっぺを触ってみたくなるような子どもたちだった。こんなに可愛い子ども、しかも 2 人と一緒に 2 日間を過ごすことを考えたらうれしくなって、緊張もあっという間に解けた。

子どもたちは最初、少し恥ずかしがっていて、話しかけてもうなずくだけで口を開こうとしなかったが、

3 分も経つと、いつもの調子に戻り、車に乗るとすぐに大人にはわからない言葉でにぎやかにしゃべり始めた。そして今日の第一目的地である横浜の中華街に着くころにはすっかり私に懐き、「お姉ちゃん」「お姉ちゃん」とひっきりなしに呼びかけられた。「この 2 日間はきっと幸せな 2 日間になるだろう」と、なんとも素晴らしい予感がした。

中華街は道の両側に中国らしい店舗がたくさん建ち並び、人通りも多く、とてもにぎやかだった。でも松木さんによると、今日は人が少ないほうだという。日本人は中国にとても興味があることが分かった。少なくとも食の面では。

中華街の揚州飯店で日本の中華料理を味わった。なかなか美味しかった。確かに中国本土の中華料理の味とは違うが、日本特有の風味が加わって、なかなかいい味を出していた。やさしい性格の松木さんはまずリュックサックの中から子どもの食事用エプロンを取り出し、2 人の子どもの好みに合わせて食事を取り分け、餃子を小さく分けて冷ましてから、ようやく自分の食事に取り掛かった。

松木さんは子どもたちの世話を焼きながら、私にこの子は熱いものが食べられないだとか、この子は辛いものが食べられないだとか説明してくれた。その几帳面さには頭が下がった。リュックの中には子どもたちの上着や長ズボン、ハンカチ、ナフキンが入っていて、必要なときにすぐに取り出して使えるようになっていた。専業主婦の妻を持ち、仕事が忙しくても、日本のお父さんはこんなにも丁寧に子どもの世話をするものなのか……。日本の子どもたちがこうした両親の細やかな心配りのもとで大きくなっていくことを知った。

昼食の後、港へ行って観光船に乗り、美しい港の景色を楽しんだ。3 時には子どもたちのおやつの時間ということで、私も一緒に美味しいケーキをいただいた。

日本に着いてから毎日緊張の連続で疲れているだろうと、松木さんは私にゆったりとリラックスできるスケジュールを立ててくれていた。3 時のお茶を終え、4 時ぐらいに松木さんの家へ向った。途中スーパーに立ち寄ったので日本のスーパーを体験することができた。

松木さんの家に着くと、簡単な化粧でも十分に美しい奥さんが門の前で出迎えてくれた。奥さんは松木さんと同じように気さくで、その誠実さが人に安心感を与えていた。いっしょにいてほとんど緊張感を覚えることがなかった。

松木さんの家は典型的な日本家屋で、二階建ての一軒家だった。そんなに大きくはなかったが、合理的な造りで、装飾もシンプルでさっぱりとしていた。客間には子どもたち専用のスペースがあった。家に着くと、2 人の子どもたちはすぐにテレビの子ども番組に飛びつき、松木さんはその傍らで新聞を読み、奥さんはキッチンで食事の支度を始めた。私が来たことで何かが妨げられるというようなことは一切ないようで、これが彼らの普段の生活なのだ。中国に行ったことのある松木さんが、日本人の普段の生活を知りたいと思っている私のために、あえて特別なことをしなかったのか、あるいは、もしかすると、これが彼らの性格なのか。どうであれ、私はとてもリラックスすることができたし、日本人の本当の普段の生活を目にすることができた。

夕食はハンバーグだった。奥さんによると、日本の子どもが一番好きなメニューだという。確かにとても美味しかった。ハンバーグには松木家オリジナルの食べ方や「家庭」の味がつまっていた。

日時：10 月 24 日（土） 6 日目
大学名：中国石油大学
氏名：張振欣

今日は少し曇っていたが、とても早く目が覚めた。ホームステイの日だったからだ。

朝食をすませると、あわただしくホテルを出発し、ホストファミリーと対面する場所に向った。あま

り大きくない部屋でドキドキしながらホストファミリーの到着を待った。10 分後、中肉中背の溌溂とした表情の中年男性が部屋に入ってきた。僕のホストファザーの世古口修さんだった。

簡単に挨拶を済ませ、僕と世古口さんは部屋を後にした。世古口さんの家へ向う途中、いろいろな話をした。世古口さんは日立マクセルに勤めており、今年 1 月にアメリカから帰国したばかりだという。駐車場でホストマザーのマリアさんと対面した。マリアさんは明るく活発なお母さんだった。僕を見ると、とても喜んでくれた。

駐車場を出ると、まず住宅街の中にあるお茶屋に連れて行ってくれた。マリアさんによると、このお茶屋は 5 年前にできたものだが、内装が非常に凝っていて昔風の造りになっているという。ここで新鮮な緑茶を味わいながら、午後の予定について話し合った。ときどきコミュニケーションに支障をきたしたが、彼らが僕をとても歓迎してくれていて、僕にいろんなものを見せたいと思っていることはよく伝わってきた。

世古口さん一家はサッカー一家として知られていたが、これは浦和のサッカー熱の高さと大いに関係がある。世古口さんと 2 人の息子にとっては「サッカーこそ命！」というふうだった。家族でテレビを囲んで好きなチームを応援している様子が想像できるが、それはなんとも温かく、楽しい時間に違いない。

13 歳と 9 歳の 2 人の息子はサッカーを観戦するだけでなく、自分でもプレイをする。世古口さんが息子たちがサッカーの練習をしている場所に連れて行ってくれた。そこは中国の学校と同じような感じで、子どもたちがサッカーの練習をするのを保護者が見守っていた。子どもたちがまだ小さいからというよりも、子どものそばに寄り添い、子どもたちの成長を見守りたいという親の気持ちが伝わってきた。世古口さんはきっぱりと、子どもと家族が人生の中心だと言っていた。

この日の夕食は寿司だった。この前ホテルで食べた寿司とは違って、今回は手作りだった。日本の家庭ではどんなふうに食事をするのか、とても興味があったが、実際は中国とあまり変わらなかった。伝統的で、種類が多かった。手巻き寿司は簡単に作ることができた。でも、そのなんの変哲もない中に、一つの家庭の歴史がつまっている。中国の家庭も同じだ。

あっという間の一日で、少し疲れた。心が温かい気持ちで満たされていくのを感じながら眠りについた。

日時：10 月 25 日（日） 7 日目
大学名：北京語言大学
氏名：崔上智

今日はホストファミリー一家と一緒に幼稚園のお祭りに参加した。私はそこでお母さんたちの手作りのおもちゃを買った。ここでの売り上げはすべて次の活動の経費になるという。また、盲導犬訓練のデモストレーションも見た。募金箱に少しお金を入れると、うれしい気持ちになった。たくさんの人のおかげで日本を訪問することができ、こんなにも多くのことを体験し、多くのことを学ぶことができたので、社会に恩返ししたいと思っていたからだ。

朝食はホストマザーと一緒にサンドイッチを作った。お母さんは丁寧にサンドイッチの作り方を教えてくれた。お昼はみんなでお好み焼き屋へ行って、自分たちでお好み焼きを焼いて食べた。ホストファミリーの人たちは私にいろいろなことを経験させ、私のために食事を作り、私が自然に日本人家庭の中に溶け込めるようにしてくれた。本当にありがたいと思った。これらの経験から得たものは大きい。

午後 4 時、ホテルに着いた。一家全員で送ってくれたが、坊やは別れのときが近づいているのを知ってかとても寂しそうだった。そしてずいぶん長い間私と歩き、最後に一緒に写真を撮った。彼らと一緒

に過ごした素晴らしい時間は一生忘れないだろう。皆さん、本当にありがとうございました。

夜はお台場へ行き、トヨタのショールームを見学した。車のショールームを見たのは始めてだったが、ショールームは 1 階と 2 階に分かれ、とても豪華だった。

日時：10 月 25 日（日） 7 日目
大学名：首都師範大学
氏名：劉吉

今日はホームステイの 2 日目。午前 8 時過ぎに起床すると、中沢さん夫妻はすでに部屋を片付けていた。10 月末の長野はちょうど紅葉が真っ盛りで、窓の外の景色は美しく、一面黄金色に輝いていた。朝、ベランダで伸びをして遠くを眺めると、生きて生活していることのすばらしさを実感した。9 時、朝食が始まった。朝食は一家全員が集まる時間であり、窓を背にして、片手にコーヒー、片手にサンドイッチを持ち、中沢さんとは現在の経済情勢を、中沢さんの奥さんとは娘さんの生活について話をしていると、まるで家族の一員になったような気がした。

朝食の後は中沢さん夫妻を手伝って別荘の掃除をした。週末しか別荘に来ないため、別荘を離れるときにはいつもしっかりと掃除をする必要があるのだという。まずは自分が使った部屋から始めた。ベッドを整え、床を掃き、雑巾をかけた。それから他の寝室、最後に 1 階の掃除をした。白髪が目立つ中沢さんだが、元気に別荘の掃除をしていた。なるほど日本人は平均寿命が世界で最も長く、60 歳を過ぎてもこんなに元気なのだと感心した。

1 時間余り掃除した後、食べるものと荷物を持って東京に戻る支度をした。車に乗る前に中沢さんの奥さんと一緒に別荘の周辺を散歩し、日本の秋の朝を満喫した。周りはすべてヨーロッパ式の建物で、草も木も豊かに茂り、たまに近所の人と出会うと、親しげに挨拶を交わしたり、立ち止まって二言三言会話をしたり、とてもよい雰囲気だった。

東京に戻る途中、ちょうどバザーをやっていた。中沢さんが教えてくれたところによると、収穫した農作物を展示し、ハロウィーンを祝うために年に一度開かれるバザーだという。

バザーの会場はとてもにぎやかだった。地元農家による農作物の販売があったり、誰の野菜が一番大きいかを競い合うコンテストや農業大学の学生による農業に関する知識の紹介、ゲームなどが行われていた。その中でもあるゲームがとても面白かった。農業大学の学生たちが大小さまざまなカボチャを並べ、その重さをお客さんに当てさせて、正解したら景品がもらえるというものだった。カボチャはどれも学生たちが自ら研究・栽培した品種であった。一番小さなカボチャを抱えて、スイカを買うときの要領で「5 キロ！」と言うと、学生がびっくりしていた。正解は 6 キロだったが、正解に近かったので景品をもらった。小さなカボチャ 1 個だった。バザーには子どもたちが参加できる出店もあって、カボチャの彫刻や木工工作など、いろいろと興味深かった。

また、山の上の別荘のオーナーたちの出店もあり、世界各地で買った土産物を売っていた。国連の仕事でアフリカに滞在していたことのある女性はそのとき集めた小物を売っていた。彼女は売り上げをすべてインドネシアの震災地に寄付するつもりで、傍らには募金箱も用意されていた。また、特色のある軽食も売られており、中沢さんがいくつか買ってくれた。人々がおしゃべりをしたり笑ったりしているのを見ながらそれを食べていると、自分も中沢家の一員で、家族と一緒にバザーに来て屋台の料理を味わっているような気持ちになった。

午後 2 時過ぎ、東京に戻って中沢さん夫妻と一緒に中華料理を食べ、楽しい 1 日が終わった。別れる時、

中沢さんの奥さんは「別れの言葉は言いませんよ。私たちの友情は始まったばかりだから。これからも連絡を取り合いましょう」と言った。

日時：10 月 25 日（日） 7 日目
大学名：首都師範大学
氏名：趙雲

ホームステイの 2 日目。昨日の疲れもすっかりとれ、新たな 1 日への期待が高まる。朝食を終え、戸川さんと奥さんと一緒に戸川さんの家からそう離れていない蘆花恒春公園へ行った。そこには明治時代の建物がいまなお当時の姿のまま残されていた。日本の庭園は至るところに緑の美しい木々や澄んだ水がある。建物の中は自由に入って見学できるようになっていた。続いて、次大夫堀公園民家園へ向かった。昨晩は、東京は一晩中雨が降っていたため、朝の公園は少し肌寒かった。公園内の建物は昔のままの状態をとどめているということだった。園内では最も伝統的な方法で鉄器が作られていた。機械を使って作ったものに比べればいろいろと規格に合わないところもあるが、素人が作ったものとしては十分であった。

昼食後は原宿を見学した。原宿は若者が集まる場所であり、奇抜な格好をした若者がたくさんいた。しかもちょうどハロウィーンのシーズンであったため、仮装した子どもたちもいて、とても可愛らしかった。週末の原宿は普段に増してにぎやかで、たくさんの若者が集まっていた。表参道にも足を伸ばした。表参道は原宿とは異なり、高級感漂う商業街である。ここの建物の多くは有名な建築家が設計したものだ。戸川さんの奥さんが表参道について熱心に説明してくれた。

時間が迫り、急いでホテルに戻らなくてはならなくなった。手続きを終えた後、戸川さん一家に別れを告げた。2 日間という短い時間ではあったが、別れるのが辛かった。戸川さんが「自分たちは日本のお父さんとお母さんだ」と言ってくれた。このとき戸川さん夫妻に向って初めて「お父さん」「お母さん」と呼びかけた。そのときの気持ちは言葉では言い表せないものだった。私は二人に北京にぜひ来てくださいと言った。そのときは私がホストになって中国や北京のことを紹介したいと思う。

夜、お台場からホテルに戻った。少々疲れてはいたが、いまだ興奮冷めやらずという状態だった。ホームステイは終わってしまったが、私と戸川さん一家との縁は終わることはないと信じている。頑張らなくては！将来のために、今回の訪日が順調に進むように、そして未来の中日友好のために、頑張らなくては！

日時：10 月 25 日（日） 訪日 7 日目
大学名：首都師範大学
氏名：郭潔威

今日はホームステイの最終日。朝、目覚めた私を最初に迎えてくれたのは可愛いチャチャだった。ベッドのそばに寄ってきて、私の手を舐めた。昨日の夜はぐっすり眠れた。きっとこのところの疲れがたまっていたのだろう。昨晩はまるで自分の家のベッドのように、安心してぐっすりと眠ることができた。

1 階に降りてお父さんとお母さんに「おはようございます」と挨拶し、私の新しい 1 日が始まった。お父さんがチャチャの散歩に行こうと誘ってくれた。外は小雨が降っていた。日本に来てから初めての雨だった。空気が湿っていて、体を思いっきり伸ばして深呼吸したい気分になった。住宅街はひっそりとしていて、しとしと降る雨の音が聞こえるだけだった。たぶん日曜日だからだろう。人影はほとんど

なかった。私とお父さんはチャチャに雨具を着せて散歩をした。日本人の環境意識はやはり高い。それは一般市民の一人ひとりにまで浸透しているようだった。お父さんがチャチャを連れて散歩に出るときは必ず小さな袋を持ち歩く。中には古紙と水が入っている。古紙はチャチャの糞を包むため、水はおしっこを洗い流すために使うという。ペットを飼うことで環境を破壊する人は一人もいないのだ。

散歩の途中、日本の住宅事情についてお父さんに質問した。東京の地価はとても高いことが分かった。これまで北京の地価ほど高いものはないと思っていたが、やはりまだまだ知らないことが多い。

朝食は盛りだくさんな日本式の食事だった。味噌汁に焼き鮭、ご飯、それにちょっとしたおかず、すべてお母さんの手作りだった。朝食の後、みんなで原宿に出かけた。原宿は流行の中心地であり、日本の流行はすべてここから生まれるという。右も左もおしゃれなファッションに身を包んだ若者ばかりで、ありとあらゆる色彩にあふれ、にぎやかだったが、やはり自分と原宿の間には少し距離があるように思えた。派手なものは人の目をくらませるが、やっぱり本来の姿を失ってはいけないと思った。

午後３時 40 分、里佳さんが早めに代表団の集合場所に送ってくれた。私はまだ十分時間に余裕があると思っていたが、里佳さんは遅刻しないようにと早め早めの行動だった。日本人は本当に時間をよく守る。これは素晴らしい美徳だと思う。一切の行動は規律があってこそ保障されるのだから。日本に来てからは毎日、こうした小さな感動の連続だった。

２日間のホームステイはあっという間だった。これは私にとってまったく初めての体験だった。知らない人の家に泊まり、普通の日本人と楽しい一日を過ごし、日本人の親切さと行き届いた心配りを感じたことで、日本をより身近に感じ、より深く理解できたように思う。日本滞在の日々もいよいよ終わりに近づき、去りがたい思いがつのるが、今回の貴重な経験はきっと素晴らしい思い出になることだろう。残りの数日を大切に過ごし、しっかりと学んで帰りたいと思う。そして、日本を去るときには、心残りなく、素晴らしい思い出をたくさん携えて、この旅を終わらせたいと思う。

日時：10 月 26 日（月） ８日目
大学名：北京化工大学
氏名：鄧玲玲

午前中、秋葉原へ買い物に行き、免税店で友人たちへのお土産にストラップを買った。SO EXPENSIVE! 父と祖父のために髭剃りも買った。本当は叔父にも買おうと思っていたのだが、叔父はたくさん持っているので必要ないと思ってやめた。自分用にはじゃがいもの皮むき器とカットナイフを買った。私は包丁を使うのが苦手なので、休みのときに家で料理をするときに便利だろうと思ったのだ。

その後、中国駐日大使館へ行った。崔大使が親切に迎えてくれた。崔大使を囲んで中日関係をどのように改善するかについてディスカッションをした。団員たちは次々と自分の意見を述べたが、私は発言できなかったので、ここで自分の考えを述べたいと思う。

双方の国民に見られる敵対心は、双方がお互いにお互いのことを理解していないことと大いに関係があるように思われる。どちらも自分は相手のことを十分に理解していると思っているかもしれないが、その理解はメディアや書籍の評論などを通したものに過ぎないのではないだろうか。メディアや本の評論はその発言者の視点や立場によって異なり、相手に対する認識も一方的であったり、あるいはねじ曲げられていたりすることがある。そのために双方とも正しく相手のことを理解することができなくなり、相手に対する不快感が生まれ、それが激しい対立にまで発展してしまうことになる。しかし、相手に近づき、相手の生活にまで入ってみると、自分の考えが偏っていたことに気がつく。この「走近日企・感

受日本」プロジェクトは中国日本商会の支援によるものだが、中国国内でも同じような活動を行い、日本の若者たちに「中国に触れ、中国を感じて」ほしいと思う。私たちの世代でも政治の世界に入ろうとしている人たちは大勢いるし、その人たちがこれから高い地位に上がっていく可能性もあるわけだから、双方の政治に携わる人たちが相手をよく理解し、厚い友情があれば、私たちの未来は明るいものとなるだろう。

ただ、このような「走近日企」だけではまだまだ不十分だと思う。一橋大学の学生が言っていたように、日本を全面的に理解することが必要だ。日本の大手企業や中上流階層の理解だけにとどまっていてはならない。今後はこうした活動をさらに充実させ、日本の底辺にある人々の生活についても知り、彼らの暮らしに対する考えや姿勢を理解する機会が持てるようになればと思う。

日時：10 月 26 日（月） 8 日目
大学名：北京語言大学
氏名：成鵬

今日の東京は一日中雨だった。でも僕たちのスケジュールには全く影響がなく、午前中、買い物の時間が 1 時間あった。みんなこの時間を待ち望んでいて、「略奪」という言葉で形容しても言い過ぎではないほどの勢いで友人や両親へのお土産を買いあさった。その後、僕たちの「実家」とも言える中国駐日大使館へ行った。崔天凱大使が忙しいなか会ってくれた。僕も北京語言大学の学生を代表して簡単な挨拶をした。それから座談会形式で崔大使とディスカッションを行ったが、まるで身内と昔話をしているかのように、打ち解けて楽しく話をすることができた。

午後は日本の名門大学の一つである一橋大学を訪問した。一橋大学の担当者が大学の歴史や学科、学校運営の特徴について紹介してくれた後、図書館や緑あふれるキャンパス、歴史ある建物を案内してくれた。ヨーロッパ式の上品な感じのする大学だった。

夜は一橋大学の学生たちと交流し、一緒に夕食会に参加した。彼らの博学さと独自の観点に自分の未熟さを知った。同じ世代ということでみんなすぐに仲良くなった。彼らはそれぞれ異なる目標を持ち、自分の目標に向かって努力していた。僕も見習うべきだと思った。今日は一日雨だったせいか、みんな疲れたようだった。明日はディズニーランドなので、今日はしっかり休むことにしよう。

日時：10 月 26 日（月） 8 日目
大学名：首都師範大学
氏名：邵玉珊

大使館と一橋大学では楽しく、率直に語りあうことができた。

崔大使のまとめの言葉が印象的だった。「私たちの感覚や見解は時間とともに変わるものだが、いま、私たちがこの瞬間に感じていることに間違いはない」。

今回、私たちは確かに日本経済のすごさ、国民の質や生活レベルの高さ、先進的な環境保護技術、大学生の生活などをこの目で見ることができた。これらを中国と対比してみれば、中日両国の共同の利益が容易に見えてくる。中国は日本の資金と技術を必要とし、日本は中国の市場を必要としているのだ。国民感情から言えば、両国の人々の間にわだかまりがあるわけではない。ただ、中国は日本より遅れているので、中国を理解したいと思う日本人があまり多くなく、このために多少の誤解が生まれ、メディアの報道に簡単に惑わされてしまっているだけだと思う。

中国の一時的な立ち遅れは私たちに歴史的使命を与えている。中国はすでに発展の道を歩み始め、その方向性もはっきりとしているが、最終的な目標達成のためにはなお努力が必要である。

一橋大学での座談会では、一橋大学商学院の学生たちと一緒に中国の環境保護の現状について討論した。私はちょうど石油大学の学生と同じグループだったため、中国の石油燃焼から話を始め、中国が石炭や石油の代替として新エネルギーを利用することの難しさ、コストの高さ、地域格差が大きいこと、先進的な技術が不足していることなどを説明した。同じグループの２人の日本人学生は、私たちの説明で中国がどうして有効な措置をとらずに汚染を拡大しているのかを理解したようだった。私たちは日本の技術支援を必要としている。日本もかつては汚染の道をたどって来たわけだし、すでに発展を遂げた国として途上国の環境保護活動を支援する責任があるのではないだろうか。

２人の日本人学生は中国旅行をしたときのことに言及し、中国と日本の国力はそんなに変らないと言った。そこで私たちは、人口の多さ、発展の地域的不均衡、国民の質などといった問題を指摘し、日本の人に中国の実情をもっとよく知ってほしいと話した。

懇親会の時には社会学部の学生とも交流したが、日本の大学院生はしょっちゅう視察や実地調査に行っていることを知った。学部生の頃にはアメリカへ行ってダンスコンテストに参加したこともあるという。自分もただ外国語を勉強するだけでなく、社会のことや企業についてもっと知らなければならないと思った。そうでなければ言葉だけ一人前の「外国語バカ」になってしまうような気がした。

日付：10 月 27 日　9 日目
大学名：北京語言大学
氏名：黄征

午前中に日本航空を訪問した。驚いたことに通訳は日本語学科の先輩だった。普段見られないものをたくさん見ることができた。大切な試験を諦めて日本に来ることにしたが、多くの収穫があり、「失うものがあれば、必ず得るものがある」ということが、今回よく分かった。明日で訪日団の全スケジュールが終了する。今回経験したたくさんの良い思い出をいつまでも忘れずにいたいと思う。

特に客室乗務員の訓練から学ぶことが多かった。例えばどのように接客するのか。どのようにすればお客様に不快感を与えずにすむのか。客室乗務員としての素養を身につけるために茶道まで習っているということだったが、日本文化をうまく職業訓練の中に取り込んでいるのが素晴らしいと思った。

午後はディズニーランドに行った。日本に来て、初めて思う存分遊んだ。今回の訪日のクライマックスだ。列に並んで中国では乗ったことのなかったウォータースライダーに乗った。みんな全身びしょ濡れになった。高速カメラで撮影された自分たちの写真がとても面白かった。

また好きな人と日本に来て一緒にディズニーランドで遊びたいと思った。

ホテルに戻ってからも興奮が冷めやらず、友人と買い物に行った。どんなにがんばっても手元の硬貨がなくならない。日本のお金が中国と最も違う点は硬貨が多いことだ。最も額の小さい紙幣が 1000 円。物価も高い。これでは中国人の日本への個人旅行もここ数年は流行りそうにない。ごく限られた人たちが旅行に来るだけだろう。

日付：10 月 27 日（火）9 日目
大学名：中国石油大学
氏名：趙若彤

台風一過、今日は気持ちのよい晴天だ。40 階にあるレストランに座って絵のような美しい景色を眺めながら、日本式の朝食を食べていると、ここ数日の旅の疲れがすっかりとれたような気がした。遠くに

見える富士山は高層ビルとは対照的にその神聖さが際立っていた。どんどん東京というこの都市が好きになっていく自分を感じた。明日はもうここを離れる。とても名残惜しい。このまま充実した気持ちで今回の訪日を締めくくりたいと思った。

午前中、日本航空を見学した。まず、日本航空の概況と普段よく見る飛行機の機種をいくつか紹介してもらった。その後、飛行機の基本的な飛行原理についての詳しい説明があった。説明を聞いているうちに以前学んだ物理の知識を思い出した。「学以致用（実際に応用するために学ぶ）」という言葉が身近に感じられ、人類の才智とその驚くべき創造力に感動を覚えた。

説明の後、飛行機の整備場を見学した。そこは大型飛行機が同時に 2 機収容できる大整備場だった。そこで現在建設中の滑走路や運行中の飛行機の離着陸を見ることができた。きれいに晴れ渡った空、美しい雪山、翼を広げて旋回する飛行機、そのすべてが一副の絵のようだった。羽田空港と北京や上海などの中国の都市を結ぶ便がまもなく開通されることを知り、みんな喜んだ。これも中日両国の往来がより深まったことの表れだろう。

整備場の見学が終わり、きれいな客室乗務員に案内されて乗務員の訓練施設を見学した。すべての客室乗務員は厳しい訓練を経て初めて職務に就けることを知った。服装や化粧、話す言葉や立ち居振る舞いにいたるまで、落ち着いた上品さがあった。一人の客室乗務員が言った。「笑顔の合格基準は顔の下半分の笑みを隠すことです。目だけで笑っていることが表現できたら、それが最高の笑顔です」。客室乗務員がきれいで感じがいいと感じるのは、彼女たちに真心があったからなのだ。真心があるからこそ親しみや温かみを感じることができるのだ。

今日は大好きなボーイング 747 を見ただけでなく、747 の訓練用模擬客室の中で昼食をとることができた。客室乗務員が業務中に食べるものだ。最後に案内役の客室乗務員と記念撮影をした。

午後、気持ちのよい天気の中、待ちに待ったディズニーランドに行って遊んだ。スプラッシュマウンテンやビックサンダーマウンテンではみんなの興奮が最高潮に達した。辺りが暗くなった頃、中国人が話しているのが聞こえた。突然、北京を思い出し、懐かしくなった。東京がどんなににぎやかでも、胸中の北京を忘れることはできない。今はただ大声で叫びたい。「祖国よ、もうすぐ帰ります」と。

日付：10 月 27 日（火）9 日目
大学名　首都師範大学
氏名：于阿楠

午前中、JAL を見学した。JAL は今回日本に来るときに利用した飛行機で、すでにその飛行機と乗務員のサービスを経験していたが、JAL についてもっと知りたいと思っていた。

最初に航空に関する興味深い内容の講義があった。日本航空の社員が飛行機の起源、歴史、飛行原理及び構造等のあれこれを説明してくれた。内容の濃い PPT による説明を受け、知識を得ただけでなく、最後まで興味深く講義を聞くことができた。全員多くの収穫があった。

説明が終わった後、客室乗務員と整備士の制服が着られることになり、みんな次々に着て記念撮影をとった。私も客室乗務員と整備士、機長の制服まで着てみた。制服を着ると、まるで自分が本当の乗務員になったような気がして、最高の気分だった。

その後、飛行機の整備場を見学した。ボーイング 747 があった。ちょうど整備をしているところだった。こんなに近くでよく耳にする機体を見学できてとても嬉しかった。飛行機の前で写真を撮った後、すぐに車に乗って客室乗務員訓練センターを見学した。そこは間違いなく訪日団の男子学生が最も行きたかっ

た場所であり、実は私も楽しみにしていた。きれいな客室乗務員が一体どのような訓練を受けているのかを見てみたかったからだ。

彼女たちが講義を受けている教室を見学した。教室では訓練生が先輩の講義に耳を傾けていた。飛行機の飛行知識以外にも、マナーや安全知識などいろいろなことを学ばなければならない。Make up room も見たが、客室乗務員になるのは容易ではないと思った。

訓練に使う模擬客室にやってきた。客室乗務員の先輩が訓練生に説明し、模範を示していた。訓練生が客と客室乗務員の役になって訓練していた。模擬客室内で機内食を食べた。乗務員は休憩時間にこれを食べるという。冷めていたが美味しかった。

午後、夢にまで見た Disney land に行った。7 人一組、来たことのある人がリーダーになって各アトラクションを回った。最もスリリングで刺激的なアトラクションのほぼすべてに乗った。夜、Turkey とポップコーンを食べながら山車やアニメキャラクターの賑やかなパレードを見た。Disney の真髄を堪能した。

日付：10 月 28 日（水）10 日目
大学名：北京化工大学
氏名：王越

今日は最終日だ。帰りたくない。日本に来るまでは 10 日間は長いと思っていたが、今では短すぎると感じる。日本に溶け込んで、もっと日本人と交流すべきだと思うが、時間に限りがあるのでまたの機会を待つしかない。

お昼に送別会を開いてくれた。各社の代表、東京一橋大学の学生代表、ホストファミリーなど、今回お世話になった友人たちが招かれた。ホームステイと言えば、私は 2 家族にお世話になった。初めは頼雅之さん一家のところに行ったが、頼さんの子どもが病気になってしまったために一緒にいられなくなり、急遽、結城さんの家に行くことになった。したがって今日は 2 家族に会えると思っていたが、送別会の会場に着くと、渡辺さんから頼さんは送別会に来られるが、結城さんの奥さんが体調不良で参加できないと言われた。それを聞いた私の最初の反応は “I’m so sorry to hear that” というものだった。帰国前に結城さん一家にお礼を言うことができなくなった。

送別会が間もなく始まろうとしていたとき、頼さんに会うことができた。彼は私に謝った後で、彼の一家が心を込めて準備してくれたプレゼントを私に手渡した。プレゼントの中に彼の娘さんと息子さんが書いた私宛ての手紙が入っていた。とても嬉しかった。もう少し彼たちと一緒に過ごしたいと心から思った。

送別会が終わると、車に乗って空港に向かった。搭乗前にこの 10 日間を振り返ってみた。次から次へといろいろなことが思い出され、感動が止まらなかった。親切でやさしかった随行の渡辺さん、ガイドの呂先生、そして日本のホストファミリーの温かいもてなし、心からお礼を言いたい。この 10 日間のすべてのことが頭の中をめぐり、目の前に浮かんでは消えた。一生忘れないと思う。今回の訪日のためにいといろと尽力いただいた方たちに改めてお礼を言いたいと思う。皆さんの期待にそえられるように、今回の訪日の精神を伝えつつ、これからも中日両国の青少年による友好交流のために貢献していきたいと思う。

日付：10 月 28 日（水）10 日目
大学名：中国石油大学
氏名：耿阿楠

最終日、帰りたくないという気持ちで一杯になった。忙しいスケジュールで少々疲れはしたが、とて

も充実していて、時間の経つのが遅く感じられた。でも、とうとう来るべきときが来た。今晩は北京のベッドで寝ることになる。眠れないのではないだろうか。10 日間の日本訪問による心の高ぶりは簡単にはおさまりそうにない。

送別会には各社の代表とホストファミリーが出席した。仕事の都合で私のホストファミリーの河口さん一家は参加することができなかった。みんながホストファミリーの人たちと楽しそうに話しているのを見て寂しい気持ちになった。渡辺さんが私の名前を呼んで慌てた様子でそばに来た。河口さんに頼まれたという彼の同僚が、この 2 日間に撮った写真を届けてくれたという。中に家族全員からの手紙が入っていた。急いで手紙の封を開けた。涙で目がくもった。2 日間の日本の家庭での思い出が次々に思い出された。この 2 日間に培った情は断ちがたく、心からもう一度会いたいと思った。これからも世界が平和で、一般市民が自由に行き来できますようにと願わずにはいられなかった。

日付：10 月 28 日（水）10 日目
大学名：首都師範大学
氏名：謝黙超

交流、理解と調和

一つの国、一つの民族を理解するのに 10 日間はあまりにも短すぎるが、多くのことを変え、一つの国をあらためて理解するのには、10 日間は十分な時間だと思った。

今回の訪問で日本の一般人との交流を通じて思ったことは、日本人の意識中の中国は 10 年前、もしかしたら 20 年前のままであり、多くの偏見と誤解はすべて中国文化の理解不足から生じているということだった。じっくりと経験しなければならないことは山ほどある。その意味で今回の訪日はめったにない機会だったと言える。

インターネットの発達した今日だからこそ、こうした小規模の団体旅行が予想もしなかったような効果を生むのかもしれない。

このようなチャンスを与えてもらった中国日本商会、日中経済協会、中日友好協会に感謝すると同時に、佐藤さん一家の心のこもったもてなしにお礼を言いたい。今後もこのような活動を続けてほしいと思う。中国の学生が日本に行くというだけでなく、日本の若者も中国に来てはどうだろうか。中国にも日本の若者がいろいろと経験し、伝えるべきことはたくさんあるのかもしれないのだから。

学生たちの撮った写真

10月16日の北京の壮行会。中国日本商会の幹部の皆さんと
「走近日企・感受日本」の任務を胸に皆少し緊張気味です

神戸「人と防災未来センター」CGと音響効果による地
震の光景を疑似体験。皆地震の恐ろしさを実感

ワコールの1階ホールのショールーム
女子学生の目が輝いています

三菱電機稲沢製作所
世界初の螺旋式エスカレーターに試乗

静岡県農林技術研究所
見学の途中で静岡県農林大学校の学生の実習現場を訪れ、先生の話しに聞き入る中国大学生。暫しの若者同士の交流です

JA遠州中央園芸流通センター
野菜の選別箱詰めラインの現場でセンターの方の説明を熱心にメモ

三菱化学本社
ケミストリープラザの見学を終えて三菱化学の方達との昼食懇親会

東京海上日動火災保険本社
会議室でPPTを使った説明を熱心に聴取。質疑応答の時間もオーバーするほど

三菱商事本社
中国にない総合商社の説明を聞いて感激のあとは社員の皆さんと夕食懇親会。最後に会社の前で記念撮影

日本航空客室乗務員訓練センター
モックアップ客室の前で客室乗務員訓練センターのインストラクターの方と一緒に。昼食はこの中でした

中国大使館
崔天凱大使に「感受日本」の報告。大使の暖かい人柄に緊張していた学生の心も和む

歓送会
企業、大学、ホストファミリー他関係者の出席のもとでの歓送会。今日で日本とお別れです。感謝の気持ちと別離の悲しみで胸は一杯です

「京都学生祭典」実行委員会の学生の皆さんとの熱い交流でした。23万人の大祭典をプロデュースしたバイタリティに圧倒されました

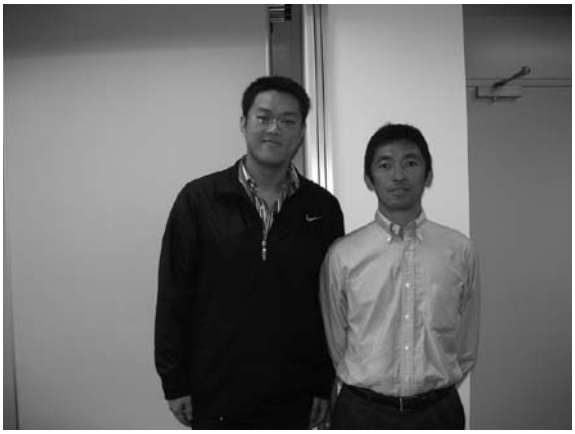
京都学生祭典の皆さんとの夕食懇親会での交流風景
写真をみるだけではどちらが中国の学生か日本の学生かわかりません

一橋大学兼松講堂前
付属図書館を見学して講堂の前で記念撮影。若者のエネルギーで降っている雨もなんのその

一橋大学での夕食懇親パーティ
ゼミナールの学生との討論会の熱い議論がそのまま懇親パーティまで続きます

ホームステイ風景

日中経済協会の前で出迎えのホストファミリーと一緒に。ちびっ子はまだ少し恥ずかしそう



日中経済協会を出発前にパチリ
今日から二日間お世話になります

ホストファミリーの居間で愛犬も一緒にカメラに納まる

明治神宮で七五三のお参りに来た姉妹と。お姉さんの和服が綺麗です

お母さんとお子さんと一緒に。ハロウィーンの南瓜もお相伴

一家との記念撮影。ここではハロウィーンの衣装です

日本点描

ホストファミリーに案内されて浅草雷門へ

神戸にて　丁度公園に来ていた幼稚園のちびっ子達と仲良く「異」世代交流

清水寺の大門横にて全員で記念撮影
大門前は人で一杯でした

京都から名古屋へ向かう新幹線の中でつかの間の休息

箱根の温泉旅館にて和服、和食の宴会。大学毎に出し物を披露。大学同士も親しくなりました

最終日は待ちに待ったディズニーへ
昼までの厳粛な気持ちから顔もほころびます